

INFORMATION *Circular*

THE JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■ ㊦54回(1995年度第2回)運営委員会報告	1
■ ㊦28回総合報告	3
■ 1994年度決算報告および1995年度予算について	4
■ DGD便り	7
■ ㊦28回日本発生生物学会大会後記	8
■ ㊦28回日本発生生物学会大会決算報告書	10
■ ㊦28回日本発生生物学会大会印象・感想記	11
■ 会議開催のお知らせ	20
■ サイエンス・ボランティア募集のお知らせ	22
■ 学術賞, 研究助成金等公募のお知らせ	23
■ 日本学術会議だより	34
■ 会員異動	36
■ 賛助会員	45
■ 賛助会員入会, 広告掲載のお願い	46

NO. 81

August 1995

日本発生生物学会

〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38

基礎生物學研究所 生殖研究部門

会 長：〒 300 茨城県土浦市湖北2丁目5-10
岡田益吉（電話 0298-22-7348, Fax 兼用）
Email: flyokada@ZoBell.biol.tsukuba.ac.jp)

DGD編集主幹：〒 227 横浜市緑区長津田町4259
東京工業大学生命理工学部
星 元紀（電話 045-924-5720）

事務局：〒 444 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
基礎生物学研究所 発生生物学研究系 生殖研究部門内
（幹事 長） 長濱嘉孝（電話 0564-55-7550）
（庶務幹事） 田中 実（電話 0564-55-7552）
（会計幹事） 吉国通庸（電話 0564-55-7551）

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込5-16-9
学会センター C21
財団法人 学会事務センター
日本発生生物学会担当係（電話 03-5814-5810）

日本発生生物学会への入退会、住所・所属変更、会費納入、および出版物（DGD、インフォメーション・サーキュラーなど）の郵送については、上記の日本学会事務センターに書面でお問い合わせ下さい。

サーキュラーへの投稿募集

日本発生生物学会サーキュラーは会員の皆様の情報誌として年3回発刊されます。学会に対する提言、研究雑感、実験手法、学会見聞記、関連学会案内、書評等どのような内容でも結構ですので、是非事務局にお寄せ下さい。

宛先：〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38番地
基礎生物学研究所・生殖研究部門内
日本発生生物学会事務局
FAX：0564-55-7556

第54回（1995年度第2回）運営委員会

第54回運営委員会は、1995年5月28日午後5時よりアイリス愛知（名古屋市）において開催された。

出席者（敬称略）：岡田益吉（会長）、長濱嘉孝（幹事長）、星 元紀（兼編集主幹）、安部 眞一、井出宏之、江口吾朗、黒岩 厚、近藤寿人、佐藤矩行、嶋田 拓、白井浩子、竹市雅俊、東中川 徹、藤澤 肇、八杉貞雄、吉国通庸（会計幹事）、田中 実（庶務幹事）、浅島 誠（オブザーバー）

1. 会長挨拶

2. 報告事項

1) 会員数の推移

1995年7月現在の会員数は1170名で、内訳は、正会員908名、学生会員251名、賛助会員7名。昨年12月との比較で34名増加。

2) Circular 80号はすでに会員に配布済み。81号は9月半ばに発行予定。

3) 1995年度山田科学振興財団研究援助に、本学会より名古屋大学・依田欣哉氏を推薦することとした。

4) DGD編集

星編集主幹から、DGD編集委員会、DGDの編集状況、及びDGDの刊行が本年1月よりBlackwell社に変更になったことに伴う諸事等、について説明があった。また、学会員によるDGDへの論文投稿を是非お願いしたいとの要望が出された。

5) 日本学術会議

岡田益吉・動物科学研究連絡委員会委員より、1995年5月10日に開催された上記委員会についての報告がなされた。その中で、日本学術会議第121回総会での伊藤正男・日本学術会議会長による総会基調報告「日本学術会議の課題—高度研究体制を目指して—」の概略、発生生物学専門委員会の設置、国家公務員採用試験（第一種）に「生物」を新しく含める件、生物教育用語集の作成等、について説明がなされた。なお、生物教育用語集に関しては先に用語集委員会よりその内容について本学会に意見を求められており、すでに一部の運営委員を含む数名の学会員の方々に検討を

依頼している旨の報告が事務局からなされた。

6) 1995年度大会

藤澤 肇氏（大会委員長）より、第28回大会の参加者数、演題数などについての報告がなされた。演題数は264（昨年比22%増）で、その内訳は、口頭発表116、ポスター148であり、その他にワークショップ3件。大会の規模は年々増加の傾向にあり、これに伴う今後の大会運営について検討すべき時期がきているとの感想が述べられた。また、愛知県、名古屋市、大幸財団等からの援助に対して感謝の意が表された。

7) 1996年度大会

第29回大会は、佐藤矩行氏（京都大学・理学部・動物）を大会委員長として、京都公会館で開催されることが確認された。

3. 審議事項

1) 吉国通庸会計幹事より、岩松鷹司、尾里建二郎両会計監査委員より監査を受けた1994年度決算案の説明がなされ、審議の結果承認された（後掲）。

2) 吉国通庸会計幹事より、1995年度予算案の説明があり、審議の結果一部修正の上、原案通り承認された（後掲）。

3) 科学研究費補助金審査委員候補者（一段審査3名、2段審査2名）を選出した。

4) 1997年度大会

第30回大会は、筑波大学の担当で開催されることに決定した。

5) 日本発生物学会事務局の移動について

学会事務局は平成8年度より東京大学の浅島 誠氏に引き継ぐことが決定された。

第28回総会報告

第28回総会は、1995年5月30日名古屋産業貿易館において開催された。議長の黒岩 厚氏を選出した後、以下の次第で議事が進行された。

1. 藤澤 肇第28回大会委員長挨拶

2. 岡田益吉学会長挨拶

3. 報告及び審議事項

1) 庶務報告 (田中 実庶務幹事、運営委員会報告に同じ)

2) 会計報告

吉国通庸会計幹事より、1994年度決算案について説明があった後、岩松鷹司会計監査委員より会計監査について報告があり、原案通り承認された。

3) 同会計幹事より、1995年度予算案の説明があり、原案通り承認された。

4) DGD編集委員会報告 (星 元紀DGD編集主幹、運営委員会報告に同じ)

5) 日本学術会議報告 (岡田益吉・動物科学研究連絡委員会委員、運営委員会報告に同じ)

6) 長濱幹事長から、科学研究費補助金審査委員候補者 (第一段3名、第二段2名) を選出した旨、報告された。

7) 佐藤矩行第29回大会委員長より開催の挨拶があった。

8) 第30回大会が、筑波大学の担当で開催されることが承認された。

日本発生生物学会第29回大会のお知らせ

日時：平成8年5月23日(木)－25日(土)

会場：京 都 会 館 (会 議 場)

〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町13番地

Tel : 075-771-6051 (代)

大会準備委員長：佐 藤 矩 行

京都大学大学院理学研究科動物学教室

Tel : 075-753-4081

Fax : 075-751-6149

1994年度決算

<一般会計>

収 入		支 出	
学会費	10,084,840	D G D印刷費	13,656,667
D G D売上げ	3,310,200	D G D編集費	2,100,000
英文校閲料	275,000	英文校閲費	500,000
バックナンバー	43,200	学会事務センター	
超過ページ代	1,322,000	事務委託費	1,396,772
文部省学術誌		発送費	1,288,167
刊行補助金	5,940,000	諸経費	137,447
広告代	105,000	D G D保管費	144,000
賛助会費	270,000	大学印刷	
雑収入	26,368	発送費 (含国内外分)	1,135,915
利息	15,279	表紙代	144,200
		サーキュラー印刷費	923,910
		要旨集印刷費	800,000
		大会援助費	250,000
		運営委員会経費	418,617
特別会計より借入	2,689,671	事務局経費	325,740
		選挙費用	936,386
		国際発生生物学会へ	37,500
小計	24,081,558	小計	24,195,321
次年度繰越金	113,763	次年度繰越金	0
合計	24,195,321	合計	24,195,321

<特別会計>

収 入		支 出	
前年度繰越金	2,251,149	一般会計に貸出	2,689,671
D G D基金	639,830	テレホンカード在庫分	59,210
第27回大会より	601,099	次年度繰越金	818,407
テレホンカード売上げ	16,000		
テレホンカード在庫分	59,210		
合計	3,567,288	合計	3,567,288

1995年度予算

<一般会計>

収 入		支 出	
学会費	10,718,000	D G D刊行費	6,798,000
賛助会費	330,000	D G D編集費	2,100,000
文部省学術誌		英文校閲費	500,000
刊行補助金	5,940,000	学会事務センター	
広告代	90,000	事務委託費	1,500,000
Blackwell 社より戻金	1,000,000	発送費	1,400,000
雑収入	20,000	諸経費	100,000
利息	20,000	D G D保管費	150,000
		サーキュラー印刷費	950,000
		要旨集印刷費	800,000
		大会援助費	250,000
		運営委員会経費	400,000
		事務局経費	300,000
		国際発生生物学会へ	37,500
		予備費	300,000
		特別会計へ繰入	2,000,000
小計	18,118,000	小計	17,585,500
次年度繰越金	0	次年度繰越金	532,500
合計	18,118,000	合計	18,118,000

<特別会計>

収 入		支 出	
前年度繰越金	818,407	テレホンカード在庫分	59,210
一般会計より繰入	2,000,000	次年度繰越金	2,818,407
テレホンカード在庫分	59,210		
合計	2,877,617	合計	2,877,617

1994年度決算、1995年度決算について

1994年度の決算と1995年度予算について、D G D刊行がBlackwell 社へ移行したことに伴い生じた変更点について説明いたします。

さて、ご承知のようにこの数年間における当学会の財政事情は年々悪化の一途をたどり、昨年度の例でも示されますようにD G D印刷費は学会費の総額を300万円近く超過し、それらを特別会計から充当してきました。このような状況を鑑み、運営委員会や総会等でご審議いただいた結果、本年度よりD G D刊行をBlackwell 社へ移行することが決定され、すでに実行に移されております。1994年度決算と1995年度予算との間にみられます収入・支出の項目及び金額の変動はこのために生じたものです。この移行に伴い、今年度のD G D刊行費は大幅に減額される予定です。このような状態が継続されますと毎年なにがしかの余剰金が生ずることになります。運営委員会でもこのような余剰金の有効使用についていくつかの提案がなされ、それらについて検討しました。しかし、1995年はBlackwell 社へ移行した初年度であり、D G D刊行に予期せぬ支出もないとはいえませんので今年度の余剰金の全ては特別会計に繰入れすることにしました。今後もこのような余剰金が生ずるようでしたらその用途について検討する必要があります。勿論次回の運営委員会でも検討いたしますが、会員の皆様におかれましてもこの点についてご意見、お考えなどございましたら是非事務局までお知らせ下さい。1995年度予算が予定どおり執行されるようですと日本発生物学会の当面の財政的危機は一応乗り切ることができたことになります。

事 務 局

“山田科学振興財団研究援助決定のお知らせ”

代表研究者	研究主題	援助金額 (万円)
依 田 欣 哉 (名古屋大学)	メダカ形態形成突然変異遺伝子の マッピング	350万円

——DGD便り——

“投稿に際してのお願い”

お陰様で、DGDの出版もどうにか順調に進んでおり、8月中旬までには第4号がお手許に届いたことと思います。万一、第4号あるいはそれより以前の号が未着の場合には、その旨をBlackwell社に直接連絡してください。乱丁、落丁、印刷不良等についても同様をお願いいたします。ご面倒ですが、DGDの質を上げることに繋がりますので、よろしくお願いいたします。なお、国内から0031-61-6238にダイヤルなされば（無料）、日本語の解る同社のスタッフと直接お話になれます。参考までに編集部にも問題とその処置につきお教えいただければ幸いです。

国外からの投稿もかなり増えてまいりましたが、会員諸氏からの投稿が頼りであることはいふ迄ありません。良い論文をお送り下さいますよう、重ねてお願いいたします。投稿に際しましては、次の4点につきご協力をお願いいたします。

1. 投稿規程を遵守してください。原稿作成前にDGD最新号巻末の投稿規程を良く読んで下さい。
2. 連絡先の氏名、住所などは英文、邦文の両方で記載して下さい。電話、ファックス、emailなども、記入してください。著者との迅速、正確な連絡のために可能な限りemailやファックスを利用しておりますが、著者への連絡は郵便でなければ困るという方は、その旨ご連絡下さい。
3. 投稿後のご連絡に際しては、原稿受領通知に記載されている原稿の登録番号（例、MS95098）を明記してください。
4. 改訂稿に添付していただくReviewerへの回答は、英文のコメントについては英文でお書き下さい。国外の方にReviewerをお願いすることも多々あります。

新入会員の方へ：

DGD37巻（1995年版）は9月1日現在第4号まで刊行されております。本年新しく日本発生生物学会の会員になられた方で、まだこれらのバックナンバーがお手許に届いていない場合は、学会事務局に至急お知らせ下さい。

第28回日本発生生物学会大会後記

名古屋大・理・分子生物 藤澤 肇

日本発生生物学会第28回大会を終えてほぼ1月たちました。当日参加者数の見込み違いで発表要旨集がそこをつくなどのハプニングもあり、大会終了直後はああすれば良かった、こおすれば良かったともっぱら反省ばかりが先にたっていましたが、少し時間をおいて振り返ってみるとまんざら悪くはなかった大会であったと思えるようになってきました。これは、ひとえに大会準備のお膳立てのわるさが大会の中身の良さでカバーされたためであり、大会が極めて健全であったことにほかならないのではと思います。

第28回大会の開催を引き受けることになってまず頭に浮かんだことは、最小限の時間とエネルギーで大会の準備と開催を行うにはどのようにしたらよいかということでした。会員数が1,000名余で大会参加者が500-600名、演題数が200題余りの大会ならごく少人数（例えば1つの講座のスタッフ3-4名）で準備・運営できるのではないかと考えたわけです。このため、1) 大会は研究成果発表（一般講演）を主体にし、これ以外に少数のワークショップを行う、2) 大会準備委員会は組織するが会議は一切行わず必要に応じて準備作業をお願いする、という方針を立て準備に入りました。このような方針はある程度貫けたと思われまふ。しかしながら、実際には、大会への賛助の依頼、プログラム編成、大会会場の設営・運営等で多くの準備委員の方々、さらには準備委員以外の学会員の多大なご助力をいただくことになりました。この場をおかりしてお礼申し上げます。

当初は演題申込み数を230題前後と見込み、口頭発表は2会場で、ポスター発表は2交代で行うこととし、それなりの会場を準備いたしておりました。しかしながら、いざ蓋をあけてみますと264題の申込みがあり、やむをえず多くの方々に口頭発表からポスター発表に変更をお願いしました。幸か不幸か、ワークショップの申込みが3題と少なかったため、何とか準備した会場でまかなうことができましたが、口頭発表では休憩時間をとることができず、また、ポスター発表の時間が不十分となってしまいました。あんなに広々と見えたポスター会場が人で埋まってしまったのには仰天しました。ポスター会場での熱の入った発表と討議を見たとき、経済的な余裕があればポスター会場をもう1部屋用意して3日間ポスターを貼りっぱなしにできたらと思いました。

ところで、大会運営を実際にやって見て、また、今後の大会の姿を予測したとき気になることがあります。それは、発生生物学会大会の規模が年々大きくなってきており、現状

のスタイルで大会を開催することが次第に困難となるのではないかという点です。今大会では演題が昨年度の大会に比べ48題の増加(22%)となっています。また、会員数がこの1年で1割位の増加となっています。この傾向はおそらく今後も続くのではないかと考えられます。このことは日本発生生物学会にとって大変好ましいことですが、大会を開催するにあたってはいくつかの問題を生むこととなります。その一つは、大会開催期間を3日とし、口演発表を2会場で行うことが困難となる点です。発生生物学という比較的限定された研究分野の大会では3日間で2会場制が大変有効であると思えます。ポスター発表を増やせばよいとも考えられますが、実際に大会を運営してみて、ポスター発表はポスターボード賃貸代金などで大変お金がかかり、更に、広いポスター展示場の確保が容易でないことを知りました。地域によっては、今大会くらいの規模の会場を確保するのは困難な場合もあると思えます。その二つは、今年度の大会の規模くらいが少数の準備委員で手作りで準備、運営できる限界ではないかと思えることです。

このようなことを考えたとき、三つほどの提案が浮かんできます。一つ目は懇親会を取りやめ、その時間を研究発表に使ったらどおであろうかということです。さまざまな大会の準備のうちで、神経をすり減らし大きなエネルギーとお金を費やすわりにはあまりうまくゆかないのが懇親会です。今大会でも、いっそのこと懇親会を取りやめその時間をポスター発表に振り向けたらより充実した大会となったのではなかったかと思っております。懇親会の代わりにポスター会場の脇に休憩室を設定しミキサー形式の交流の場が設定できれば理想的であると思えます。二つ目の提案は大会参加者の正確な人数をなるべく早く把握できるようにするため、大会参加費を事前申込みと当日申込みで金額を違えることです。三つ目は、学会本部よりの大会補助を増額することです。仮に大会参加費を1,000円値上げしても600名の大会参加者で60万円の増収にすぎません。学会の経済状況に多少の余裕が生まれるようでしたらこの様な方法で学会員に還元することが考慮されてもよいのではと思います。

今大会の準備や運営について振り返り、今のような活気のある発生生物学会大会を手作りで今後ともやってゆくにはどおしたらよいかを考えているうちに、つい少し勝手なことを書いてしまいました。

最後に、今大会を開催するにあたり愛知県、名古屋市、ならびに財団法人幸財団より多大なご援助をいただきましたことを報告し、お礼申し上げます。

第28回日本発生生物学会大会決算報告書

大会運営関係経費

1. 収入の部

大会参加費	3,091,000円
内訳 一般 (6,000×331名)	1,986,000円
学生 (5,000×221名)	1,105,000円
(非会員のワークショップ演者、会場運営の学生会員を除く)	
補助金	1,725,000円
内訳 学会本部からの補助金	250,000円
講演要旨集印刷費補助	800,000円
愛知県よりの大会助成	350,000円
名古屋市よりの大会助成	175,000円
財団法人大幸財団よりの大会助成	150,000円
講演要旨集売り上げ	3,380円
広告代・賛助金	530,000円
預金利息	178円

収入合計	5,349,558円
------	------------

2. 支出の部

印刷刊行日	1,513,980円
内訳 講演要旨集 (増刷分を含む)	1,457,500円
名札	40,000円
賛助依頼書	16,480円
郵送料・通信費	111,860円
会場費・会場設営経費	2,127,976円
内訳 会場使用料	1,048,900円
会場設営経費	1,046,368円
(ポスターボード・看板・マイク・スライドプロジェクター・スライドホルダー 等)	
雑費	32,708円
大会準備・運営経費	1,591,416円
内訳 事務機器	182,164円
運営委員会・編集委員会経費	38,227円
謝金 (3日間×38名)	1,130,710円
消耗品費	37,969円
雑費 (弁当経費を含む)	202,346円
振込手数料	4,326円

支出合計	5,349,558円
------	------------

3. 残金

0円

懇親会経費

1. 収入の部

懇親会参加費 (5,000円×270名)	1,350,000円
広告代・賛助金からの補助	558,985円

収入合計	1,908,985円
------	------------

2. 支出の部

懇親会経費	1,908,985円
-------	------------

3. 残金

0円

第28回日本発生生物学会大会の印象

東京大・大学院理学系研究科・動物学 塩川光一郎

学会会場で長濱幹事長に顔を合わせたところが、「印象記」を書いてくれといわれてしまった。これが幸運だったか、不運だったか、どちらにせよ、とにかくすぐ引き受けた。サーキュラーの為のこのような依頼は私も以前やっていたので、断られた時の困惑を考えると、イエスというしかなかったのである。面白いもので、その気になって会場を歩くと、その目で周りを見回している自分に気付くのだった。つまり、記者にでもなったような気分で、学会の雰囲気はどうなんだろうと歩いたわけである。すると、2、3気が付いたことがあった。それらを列挙して、皆さんがお持ちになった印象と比べてもらえると有難いと思う。

まず、全体の雰囲気は文句無しにきわめて盛況であった。大会委員長以下、現地の役員の努力の甲斐あって、A、B両会場それとポスター会場は大変賑やかで活性の高い学会という印象を受けたわけである。特に、B会場はA会場より小さかったので、だいたいいつも立ち見の人が多かったわけであるが、そのことも学会の熱気を表していたといえよう。座長の顔ぶれもかなり若くなっていたことも、今回の工夫だったと思われる。会の進行状況もまあまあうまくいっていたようである。質問が無いときに座長がよく質問をつくって出していたようだが、それも好感がもてた。総会への出席者は少なかったが、もともと大した問題のないときの総会はまあまあだいたいあしたものだったように思う。「ひとが少ないのはよくないのでは」との声も出されましたが、懇親会の席上での岡田節人さんの、「それもまたうまくいっていることの現れではないか、皆さん勉強ざんまいで結構」というコメントがうまくつないだ。ただし、「本当はそれだけでいいのかな？」という気持ちもきちんと付け加えられたので、この冗談めかした岡田さんのコメントは、聞く人の耳にはちょっと痛い響きを残したと思う。現在、生命誌 (Biohistory) なるものを抜げるのに努力中の岡田先生のお立場を考えると、意味深長なるものがある。

学会の話題も、そういえば、ひところの“純”発生学会というのではなく、どこか以前の分子生物学会の真核細胞領域をほうふつとさせるようなところも感じられて、時代の流れがやはりはっきりと演題に現れていた。近ごろは誰もがPCRをやり、ノザンプロットをやり、ホールマウント・インサイチュをやるという時代を見事に反映していた。学会の講演の中で1つだけオヤと思うことがあった。ある講演では生のデータがほとんどといっ

ていいほどないままに材料のもつ面白味についての話があったのだが、私個人の見解では、あれはワークショップに一席設けてあげるべきではなかったかと思った。また、発表のあるものは明らかに中間発表の性格のもので、やってる本人も「やろうとおもっていますがまだやれていません、だから途中までを話します」などと、方法を述べるに留まるものもあった。これなどは“貢献度の低い演題を減らし、時間に余裕をもたせる”という意味で次回まで待って発表してもよいのになと思えた。ただし、厳密にいうと、この点については、自分の発表も人からみるとまだまだ途中だなと思われるかも知れないので、なかなか人のことはいえないものである。だから、少し繰り返しになるが、ここではこういうふうに言っておこう。講演している本人が自ら「やれていませんので途中経過をお話します」というのはやっぱりまずいのではないかと思う。仮に、そのような状況であっても、これだけは明らかになった、といえる点をひとつ以上見つけてそれを述べるべきであろうと思うわけである。

ところで、ワークショップは大変盛況であった。ただし、これも手放しではよろこべない点があるように思ったので、次に敢えて、2、3感想を述べさせていただこう。私は2つのワークショップに参加したのであるが、共通していえたことは、座長が問題意識をはっきり持って臨み、一生懸命まとめようとしているのに比べ、スピーカーの方にそれにマッチした緊張度が必ずしも上がって居らず、聞いていてもどんどん経って行く時間がもったいないと思えるところがあった。また、聴衆について考えてみると、質問・議論・コメントがもうひとつ面白くないところが感じられ、じれったかった。スピーカーのオソリティーが提示したフレームワークの中で理解し、質問をし、自分の理解をそれにアジャストするという姿勢が強すぎはしないか、と感じた。あれでは王様はパンツしかはいていないのに“立派なお召しものでござる”というようになりかねない、そういう危険性をはらんで居るかもしれない、とちょっと思ってしまったのである。極論すれば、“立ち見が続出と言うほどに若者が集まったのはいいが、シンポジウムはつまらない内容だったので途中で大半が退席した”というようなことが万一起こったとしても、そういう評価をすることができる若者がいっぱい居ることが明日の日本の学会の盛況を保証するといえなくもないのである。選ばれたスピーカーに対してはオソリティーでもプロフェッサーでもなんでもよいから、与えられた内容はそれとして受け止め、それを自由に打ち破り（ただし、できれば礼儀正しく）、それを越えた広い精神的空間のなかで本質を見極めようという立場で、建設的に自分の疑問や意見をぶつける姿勢が欲しいところである。そして、そういう質問やコメントがぶつけられたところで、スピーカーであるオソリティーの方も、その本来の実

力を本気で持ちだしてきて、学問的に本当に興味深いやりとりが実現するのではないか、
そうゆうふう思うのである。

いってみれば、このことは、演題にも多少現れていたように思われる。いろんな材料で、
いま話題性のある（だからやっていて寂しくない）テーマがやや目に付きすぎたようにも
思える。重要であると外国あたりでいわれた遺伝子をもらうか、借り受けるか、PCRで
一部分だけコピーして使うか、あるいは自分で材料をかえてホモグロとして手に入れるか
して、われもわれもと手を出してみる。そういう傾向も感じられなくはなかった（もっと
も、自分のところでも、結構そうゆうことをしている面があるのであまり人のことはいえ
ないのは分かってはいるのだが）。

とはいえ、多くの若者のはつらつたる鋭い質問もあちこちで聞かれたので、内在するエ
ネルギーの確からしさも感じた。従って、参加者の数多ければよしというのでは決してな
いけれども、今回の大会もよい意味での学問のお祭りと言った役割を十分に果
たしたのだといえよう。その関連で、加藤賞としてまとめて聞いた話の中に、よりインター
ディシプリナリーな、自由な発想に基づく、かくれたる法則への接近のあるべき姿勢の
1つが感じられて、よかったと思う。本来、まだ多少の泥臭さのある（あってはならない
もの、という意味ではなく、あってしかるべきで、それがあからこそ、今後によりシャ
ープなチャレンジを受けるに足るものとして横たわっている）発生学の領域のなかで、と
りあえず、定型的でない、さわやかな学問的雰囲気をする“風”を感じたのは、私ひとり
ではなかったのではなからうか。

最後になるが、大会委員長の藤沢さんも会場の内外で絶えず全体に気を配っておられる
御様子で、ご苦勞なことだと感謝した。特にB会場では役員のひとりがマイクを持って
いちいち質問者に走っておられたのも近ごろ見かけない丁寧な手の入れ方と感心したこと
を付け加えたい。これは九州の福岡のことだが、筆者が学生の頃、学会といえば全国から
いろいろな先生方が集まってきてあちこちの宿屋に分散して泊まる。学生たちは勉強の為
として、無償で朝6時起きをしてバスに分乗し宿まで迎えにゆき、会場に運ぶ手伝いをす
る。いまの人が聞いたらそんなバカな、というようなことを大まじめにやっていたわけで
あるが、その頃の活動を少し思い出させるような、近ごろ珍しい主催者側の努力とお見受
けした次第で、この場を借りて特に感謝申し上げたい気持ちである。

第28回日本発生生物学会大会雑感

姫路工大・理・生命 阿形清和

私は長らく学会というものは、単に「発表をする」「発表を聞く」だけでなく「発表を種に、できるだけ本質に迫る議論をする技を磨く」場だと思っていた。それは、私が初めて参加した学会が発生生物学会だったからであり、それからしばらくは発生生物学会以外の学会に参加したことがなかったためであった。しかし、他の学会に参加するようになってわかったことは、一般に学会というものは「発表をする」「発表を聞く」の2つの要素によって成り立っていることだった。そして、もうひとつわかったことは、みんなが「発表を種に、できるだけ本質に迫る議論をする技を磨いている」、そんな雰囲気伝わってくる学会のほうがおもしろいことだった。

発表の細かいことにこだわるのではなく、その研究発表で知りたい問題点の本質にいかにか迫るのかを発表を聞く側も一緒に考え議論する。アプローチとしてもっと他の適切なアプローチはないのか、自分だったらどういうアプローチをしたなどと人の発表なのに自分の頭の中で繰り返し自問自答し、それを演者につけてみる。そういうことを多くの参加者がやっていたので、私の頭では考えつきもしない議論がでてきた時などは、なるほどこういう考え方も成立するのかと感心しながら聞いた記憶も多い。そういう繰り返しの中でサイエンスの考え方の幅をひろげ、学会に参加して得たものは多かったと思っている。

特に発生生物学会というサイエンスは、現象に立脚した上で、各自がいろいろな好みのアプローチをしかけられるという面白味があり、アプローチの仕方は最も実験者の個性のあらゆる部分となっていた。いろんな動物が登場し、交換移植あり、培養あり、細胞生物学的・電顕学的・生化学的・遺伝学的アプローチ等、しかけの仕方は様々であり、それゆえアプローチの仕方によって得られる情報の質も異なっており、それらの情報を統合しながら問題の本質に迫っていくということになる。学会ではいろんなアプローチの仕方をする人が一堂に会することになるので、それぞれのアプローチの仕方の限界と利点を吸収しながら自分の研究に反映させることができたのである。

しかし、今や分子生物学的アプローチが全盛の時代であり、最近では発生生物学会といえども《発表する側と聞く側の双方向コミュニケーション》傾向から《発表する側から聞く側への一方通行》傾向になりつつあることはいたしかたないといえよう。私も、いろんな動物の *in situ hybridization* のパターンを断片的に頭に入れて学会から帰るというパタ

ーンになりつつある。発生生物学会がもっていた独特の良さが減った気がする。

そこで、今回いろんな動物の *in situ hybridization* のパターンを断片的に頭に入れて帰るだけでなく、発生生物学会らしく一歩踏み込んで *in situ hybridization* のパターンから先を議論するワークショップをトライしてみたのである。特に《発表する側から聞く側への一方通行》ではなく《発表する側と聞く側の双方向コミュニケーション》を復活させることに重点を置いて、発表する側からいくつかの点をだしてもらい、聞く側が議論しながら点と点を結ぶ作業をするという前代未聞の試みをしてみたのである。この大胆なる試みが、思惑通りうまく行かなかったことは松崎氏のコメント文を読んで頂ければよくわかると思われる。大胆なワークショップをアレンジしたにもかかわらず、私本人の力量と準備がたりなかったために消化不良に終わってしまったことは悔やまれる。あまりにも私が設定した点と点が離れすぎていたことが一番の原因であり、点と点を結ぶ作業をするにはまだ情報が少なすぎたということになる。

私が発生生物学会に期待していること、すなわち、発生生物学会が単なる「発表をするあるいは聞く」場ではなく「発表を種に、できるだけ本質に迫る議論をする技を磨く」場としての面白味を保つためには今後ともワークショップをうまく利用することが重要なポイントではないかと思っている。

最後に、大胆な試みに参加して頂いたワークショップのコメンテーターの方々に感謝し、時間の関係で割愛されたコメンテーターに深謝するとともに、たくさんのわがまを聞いてくださった大会事務局のかたがたにこの場をかりてお礼申し上げます。

第28回日本発生生物学会大会印象記：分子発生形態学と進化をからませて発生を考えるワークショップに参加して

新技術事業団・吉里再生機構プロジェクト 松崎 貴

今大会を締めくくるこのワークショップは、新しい討論形式の息吹を感じさせてくれたという意味において新鮮であった。近年の分子生物学的知見の集積は、「生命現象の共通言語」として遺伝子を捉えることを、ごく当たり前のものとしてきている。この集会の趣旨は、種を越えた普遍的な発生原理の追求と、その先にある生物の本来的な特徴である多様性の理解のために、様々な動物種での知見のエッセンスを有機的にかつ要領よく結びつきたいということと受けとめた。そのために、世話人の阿形清和氏は3つのテーマを設定した。中でも最初の話題であった脊索と神経管形成との関係についての討論の展開は小気味のよいものであった。その大きな理由は、集会の進行方法を工夫したことであろう。

これまでに、違った動物を材料に一つの現象を論じるといった類のワークショップ、シンポジウムは数々あったが、その多くは1話完結方式であったと言える。各演者が一つの生物の背景から実験方法を経て山場となる結果にたどり着くまでには、往々にして時間がかかる。このため、いざまとめて考えてみようとしても、頭の中で前の演者の話がすでに曖昧となってしまっていることがしばしばある（少なくとも私は）。また、最後に総合討論の時間をもうけていることも多いが、これが特定の問題について個々の見解をぶつけ合い統合していく場となることはあまり期待できない。そもそもこの時間が予定どおり残っていることが稀であろうことは、主催者側もよく理解していることであろう。こうして、色々とおもしろそうな話は聞いたような気がするが、きちんと消化できて栄養となったのはいかほどかと考えると悲しくなってしまうことも少なくなかった。

今回の世話人の目論見は、まずいくつかのポイントを設定し、その一つ一つの問題点について、様々な視点からの解釈と根拠となる実験結果をコンパクトに紹介してもらおうと言うことだったのではないだろうか。聴衆は各ポイントごとに動物種間の普遍性と多様性を認識し、頭の中を整理しながら話を聞くことができる。これならば、私のわずかなメモリー容量でも何とかついて行くことができるかもしれないと感じた。もう少し具体的に書いたほうが雰囲気が伝わるかと思う。世話人が一番始めに証人として喚問したのは、北大の鈴木氏であった。ドミナントネガティブ型BMPリセプターを発現させたアフリカツメガエル胚には2次胚が形成されるが、この2次胚には脊索が見あたらないことを紹介した。

続いて飛び入りの提言が北里大の高橋氏からなされ、ゼブラフィッシュ胚ににわりのノードを移植した際に見られる2次胚にも、やはり脊索が見つからないことが示された。両者とも数枚のスライドのみで、ピンポイントの話題提供であったのが印象深い。ここで新潟大の平野氏より、ニワトリ胚での原条周囲の組織変化が紹介された。この中で平野氏は、原溝正中部の細胞のうち胞胚腔に落ち込んだものは脊索になり、落ち込まずに残されたものはフロアプレートになるのではないかと提案した。これに対し会場から、HNF 3- β やshhのフロアプレートでの発現は脊索より遅れることから、フロアプレートの分化にはやはり脊索からの誘導が必要であろうとの指摘があった。次に京大の高田氏より、Wnt3aのターゲットマウスの神経管周囲には管空構造が見られることが示された。この構造は、本来中軸中胚葉になるはずの細胞が落ち込み損ねたために形成されたものと理解された。ここまでの話で、脊索が無くても神経組織や軸の形成はある程度おこるが、機能的な神経管の形成には中軸中葉胚からのシグナルが必要なのであるという考えが、頭の中でまとまってきた。神経管の分化には、裏打ちする中胚葉からの縦方向のシグナルとともに外胚葉自体が発する横方向のシグナルが必要であるとの考えが提唱されている。東大の浅島氏は、アクチビンで処理する時間に応じて異なる組織が形成されることから、必ずしも縦、横のシグナルを分けて考える必要はないのではないかと述べた。続いてモザイク性の高いホヤ卵での神経組織分化についての話題提供があった。東工大の西田氏は細胞系譜の解析と割球移植の結果から、都立大の西駕氏と京大の安尾氏はそれぞれHroth遺伝子、Brachyury遺伝子の解析から、ホヤの神経細胞（脳）は内胚葉の一部によって誘導され、脊索なしでも分化することが示された。実のところ、残念ながら私は徐々に消化不良の気配を感じ始めていた。色々な話題を聞いているうちに、ポイントが何であるかが分からなくなってきてしまったのだ。このあたりでもう一度これまでの航路をおさらいし、水先案内していただけたらというのが実感である。

2つめのテーマは、先口動物と後口動物とで神経が形成される位置が腹側、背側と違っているのはどうしてかということである。まず慶応大の中島氏が、棘皮動物では繊毛帯が神経に相当し、これを境にして口器側と反口器側とでは上皮のタイプが異なることを示した。ここで会場から西田氏が、脊椎動物の神経管には繊毛細胞があるという古い記載についてふれ、神経—繊毛細胞起源説を支持した。鹿児島大の安井氏は、先口動物と後口動物の違いは、オーガナイザーに相当する部分が2つ在ったか1つしかなかったかの違いであるという大胆な仮説を展開した。大阪市大の団氏は採餌行動と繊毛による運動制御の観点から、口器の近くに神経のセンターをつくる必要性から脳が発達するようになったとの説

を披露した。ここで耳にした話はこれまで知らなかったことばかりで、驚かされる一方であった。最近の学生は生物の遺伝子はよく知っているけれど、生物そのものがどういう風に生きているのかは全然知らないなどと言われるが、私も彼らを批判する資格はないようである。3番目の話題は神経堤細胞の起源と脳形成における役割のはずであったが、残念ながら時間切れのため、これは次回に持ち越し?となった。

後半はついて行けなくなってしまったが、少なくともこのワークショップの滑り出しには新鮮なものを感じたとともに、ポイントを絞って話題を展開させる形式がもっと広まってほしいと感じた。しかしながら、この方法にはかなりの難しさがあるのも事実であろう。まず、どのようなレベルの聴衆を対象とするのかという問題がある。実際に研究に携わっている方々の討論の場とするのも重要なことではあろうが、むしろ日頃興味はあっても断片的な知識しかない門外漢が頭の中を整理する場として頂ければ大変ありがたい。次に、ポイントの設定とそれにふさわしい話題提供者をどう選ぶかの問題がある。また選んだ後には、それぞれの話題提供者に趣旨を説明し、できるだけ無駄を省いてしかし分かりやすく説明してもらえるように綿密に打ち合わせなければなるまい。実際はこの点が一番やっかいなところであろう。本番では、イントロダクションと頻繁なまとめを通してうまく道案内することが求められる。成功するしないかは、大部分オーガナイザーにかかってくる。オーガナイザーの負担が非常に大きくなることは目に見えているが、是非ともテレビの生物ドキュメンタリーシリーズものの様に聴衆を誘導していただきたいと言ったら望み過ぎであろうか。

ワークショップを離れて、大会全体の印象について少し述べたい。まず、口演会場が昨年の3つから2つに減ったことは大変ありがたかった。ただし、B会場のスクリーンが小さかったことが残念である。大きなスクリーンのある部屋を2つ確保することはなかなか難しく、毎年頭の痛い問題であろうと思われる。経費の問題もあろうが、後ろにモニターを設置することはできないだろうか。あるいは2台のスライド映写機を併用できれば、スライドを分割して大きく写したり、解説用のスライドを常に表示したりと様々な活用法が考えられるので、是非採用していただきたい。ポスター発表の時間が短かったのも気にかかった。しかし、昨年をはるかに上回る演題数であったことを考えると、大会準備委員会の方々の苦悩は私が軽々しく口を挟めるものではないことを容易に想像させる。この学会が、私達の想像を超える早さで成長していることを喜ぶとともに、わがままな会員の注文に応えるべく奮闘された方々に感謝したい。

第28回日本発生生物学会大会感想記

東京大・総文・生命系 横田千夏

学会に参加するのは、いつだってなんだか気分が弾むものだ。適度の緊張感を保ちデータに関してホットなやり取りのできる機会は、研究の上でのアクセントになる。特に発生生物学会は比較的若い研究者が多くコンパクトな学会なので、一つ一つの演題と自分の分野との距離があまり感じられなく、自分自身の問題として考えられる良い勉強の機会になる。その意味で私にとっては貴重な学会である。

本年度の日本発生生物学会は名古屋の愛知県産業貿易館で行われた。官庁街の真ん中で交通の便もよく、前には名古屋城もそびえていた。発表演題数、参加者数共に過去最大で、特にポスター会場は熱気がムンムンしており、こちらも予習してポイントを絞っておかないと、人にのまれて終わってしまいそうだった。私自身、あらかじめ要旨集には目を通していたつもりであったが、やはり実際の感覚は違っていて、まだまだ聞きたい演題が残っているうちに時間が来てしまい残念だった。また発表内容も多岐にわたり、様々な分野の研究者が発生現象の解明へ関心を寄せている現状を反映していた。

個々の発表で印象に残るものは数多くあったが、個人的には誘導関係の仕事に目がいつてしまった。誘導現象は実験形態学的な研究から始まっており、日本の研究者達も緻密で非常に優れた研究を数多く残している。そこで得られた概念の多くは、今日、分子生物学的手法を用いて分かってきた知見とも合致する。そういった伝統的な流れを継承しつつ、今日の視点で展開するということは、地味で困難な仕事ではあるが、日本人の課題でもあると私は感じる。今回の学会でも、数は多くはないがそのような発表がいくつかあり、身の引き締まる思いがした。

最終日のワークショップもまた印象深かった。[分子発生形態学と進化をからませて発生を考える]という試みで、企画者がかなり大胆な提案をしてから、各演者に各々の立場から自由に発言をしてもらうものであった。進行方法も従来とは少し異なっており、興味深いやり方だったと思う。実際には、時間の関係上順序を変えて、ステップ2と1で終わった。ステップ2は神経誘導の中胚葉との関係に焦点を絞って進められたが、特定の種で誘導現象を追っているだけでは陥ってしまいがちな袋小路も、一歩引いて他の種の知見も合わせてみることによって、出口が見えてくるのかもしれないと感じた。しかし今回は時間に限りがあったのが、私としては非常に残念であった。最終日の最後のワークショップであったにも拘わらず、大勢の人が熱心に討論していたので、もう少し深く議論すれば現在抱えている発生学上の問題や、今後のいろいろな方向性が見えてくるように思われた。それでも形態形成の機構を考える上で避けては通れないこの問題について、多くの研究者達の見識を知ることのできた貴重な機会であった。

10th International Congress on Histochemistry and Cytochemistry

第10回国際組織細胞化学会議のお知らせ

1996年(平成8年)8月18日(日)～8月23日(金)(6日間)

国立京都国際会館(京都市左京区宝池)

トピックス

1. 方法 関 連 免疫組織化学、デジタル画像処理、電子顕微鏡(細胞内小器官など)
共焦点レーザ顕微鏡などの新しい顕微鏡、酵素組織化学
オートラジオグラフ、in situハイブリダイゼーション
サイトメトリーと形態計測、遺伝子工学(遺伝子のトランスフェクシ
ョン、ノックアウト、トランスジェニック)、糖と脂質の組織化学
2. 細 胞 生 物 核と脂質染色体、遺伝子、細胞表面と接着因子、細胞回転と生長
細胞骨格と細胞内輸送、レセプターとシグナルトランスダクション
発生と分化、アポトーシスと細胞死、フリーラジカルと脂質過酸化
神経科学への組織化学的アプローチ、植物細胞の組織化
3. 疾患と組織化学 免疫-自己免疫疾患、癌-遺伝子とその表現型の組織化学
組織化学の臨床への応用、内分泌疾患への組織化学的アプローチ
感染症への組織化学的アプローチ、老化の機序と疾患
4. 酵素標識抗体法の30年

連絡先

第10回国際組織細胞化学会議 実行委員長 井端泰彦
〒612 京都市伏見区村上町383 A.C.プランニング
電話: 075-611-2008 F A X: 075-603-3816

オルガナイザー

名誉会長	小川和朗	京都大学名誉教授
名誉副会長	安田健次郎	慶應大学名誉教授
会長	藤田哲也	京都府立医科大学名誉教授
副会長	水谷 昭	愛知県心身障害者コロニー名誉総長

実行委員会

委員長	井端泰彦	京都府立医科大学第2解剖教授
財務委員長	渡辺慶一	東海大学医学部第2病理教授
地区委員長	芦原 司	京都府立医科大学第1病理教授
出版委員長	斎藤多久馬	自治医科大学第1解剖教授
プログラム委員長	中根一穂	長崎大学医学部第3解剖教授

国際会議のお知らせ

DEVELOPMENTAL BIOLOGY OF SEA URCHINS X

*Marine Biological Laboratory
Woods Hole, MA*

March 6-10, 1996

Plenary Sessions

- Gamete recognition
- Gastrulation
- Centrosomes and cell cycle control
- Gene regulation
- Signal transduction, Ca^{++} , egg activation
- Spatial expression of genes
- Physiology, evolution and ecology

Special Sessions

- Fertilization
- Acrosome reaction
- Phosphorylation in egg activation
- Chromatin
- Transcription factors
- Extracellular matrix in embryogenesis
- Cell adhesion
- Cortical reaction
- Imaging regulatory processes
- Coelomocytes and immunity
- Proteases and embryogenesis
- Advanced larval physiology

For information and applications please contact either:

Susan G. Ernst
Department of Biology
Tufts University
Medford, MA 02155
Phone 617-627-3541
Fax 617-627-3805
e-mail sernst@pearl.tufts.edu

Victor D. Vacquier
Marine Biology, S.I.O.
Univ. Calif., San Diego
La Jolla, CA 92093-0202
Phone 619-534-4803
Fax 619-534-7313
e-mail vvacquier@ucsd.edu

(In any correspondence please include your e-mail address.)

サイエンス・ボランティア募集について

文部省では平成7年度からサイエンス・ボランティア制度を実施することとなり、「サイエンス・ボランティア登録名簿の作成および提供」業務を社団法人日本工学会に委託してまいりました。この制度は、青少年や会社人に科学技術について正しい知識と理解を深めて貰うために設けたものです。

日本には自然科学に関する博物館が約260あります。しかし、来館者に説明し、かつ正しい知識と理解を与える学芸員は、1館あたり0.3名しかおりません。また、都道府県の教育委員会等が主催する各種のイベントでも、科学技術に関する正しい表現等に欠けるものも見受けられます。

そこで、文部省では、教育機関（大学・高専・高校等）で長く青少年教育に携わった方、企業等で専門家として活躍された方、特殊な技術をもっている方々のご協力を得て、全国的にサイエンス・ボランティア活動を本年度から実施することにしました。この制度は人材派遣ではなく、サイエンス・ボランティアを必要とする機関に情報を提供する事業です。

それに従って、日本工学会では下記要綱でサイエンス・ボランティアを公募いたします。

記

1. 公募の期日：いつでも受付ます。ただし、本年度は初めてですので、一応の期限を平成7年10月末日とします。
2. 応募資格：とくにありませんが、ボランティアとして青少年・社会人に科学技術の面白さを、教えたり、一緒に楽しめる方
3. 公募申込み：ハガキに氏名・年齢・性別・連絡先住所・同電話番号を明記して、日本工学会まで登録用紙を請求して下さい。
4. 資格審査：日本工学会内に設けた「サイエンス・ボランティア企画委員会」において資格審査を行い結果をお知らせします。
5. 登録用紙請求先および問い合わせ先：

〒107 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル

社団法人日本工学会「サイエンス・ボランティア係」

TEL 03-3475-4621 FAX 03-3403-1738

第4回（平成7年度）木原記念財団学術賞の受賞候補者 推薦について

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素、当財団の事業についてご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

当財団はコムギの研究を中心に遺伝・進化学の分野で世界的業績を残された木原均博士を記念し、生命科学の振興を図ることを目的として設立し、以来、横浜市立大学木原生物学研究所と連携して生命科学に係わる研究・交流・振興のための諸事業を進めています。

「木原記念財団学術賞」は、生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている者、とりわけ今後の生命科学の振興を支えるであろう若手の研究者を励まし、顕彰することを目的とします。

敬 具

推 薦 等 要 項

〔推薦の対象〕

1. 推薦の対象は、最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者で、原則として50才以下の者としします。

ただし、推薦の研究課題で他の著名な賞を受けていないこととしします。

〔推薦の依頼先〕

2. 推薦は生命科学に関する学会及び木原記念財団の役員に依頼しています。

推薦依頼学会：別添

〔推薦の方法〕

3. 推薦者は学会の代表者及び木原記念財団の役員とし、1推薦者からの推薦は1件としします。

(2) 推薦は所定の推薦書（別添）に必要事項を記入し、当財団あてに1部送付願います。

(3) 推薦の締切日は平成7年9月末日としします。

〔選考方法及び結果〕

4. 受賞者は、当財団の選考委員会で候補者を選考し、理事会にて決定します。

(2) 選考結果は推薦者及び受賞決定者に通知します。

(3) 選考結果は公表します。

5. 本賞は毎年原則として1件に贈呈します。

(2) 本賞は賞状、記念牌及び賞金200万円を贈呈します。

〈参考〉これまでの受賞者は次の方々です。

第1回 野村 大成 大阪大学教授

研究課題：発癌および催奇形性変異の後代への伝達

第2回 浅島 誠 東京大学教授

研究課題：両生類の胚誘導と細胞分化に関する研究

第3回 五條堀 孝 国立遺伝学研究所教授

研究課題：病原性ウイルスの起源と進化に関する研究

〔推薦書提出先、連絡先〕

財団法人木原記念横浜生命科学振興財団

〒244 横浜市戸塚区舞岡町641-12

T E L 045-825-3487

F A X 045-825-3307

東レ科学技術賞候補者推薦要領

- 選考委員 (委員長) 宇井理生 猪瀬 博 有馬朗人 竹内郁夫
宗宮重行 吉森昭夫 櫻井英樹 中島尚正

- (注) a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。また貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- b. 推薦を受けた候補者は、その年度および次の年度にわたって選考の対象としております。したがって平成6年度に推薦された候補者については、平成7年度候補者として再度推薦の必要はありません。ただし平成6年度の推薦以後において、追加すべき顕著な業績又は発表や受賞があった場合は、平成6年度推薦書(コピー)に加筆して当会あてご送付願います。
- c. 受賞者は、原則として1件1人とします。特に複数であることを必要とするときはそれらの研究者の寄与が同等であることを示して下さい。ただし、この場合でも1件として取り扱います。
- d. この科学技術賞は、所得税法(第9条第1項第13号二)の規定により非課税となっています。

— 25 —

第36回(平成7年度)

東レ科学技術研究助成候補者推薦要領

1. 候補者の対象……………貴学協会に関する分野で国内の研究機関において基礎的な研究に従事し、
今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる**独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者**
2. 研究助成金……………総額1億3千万円。1件3千万円程度まで10件程度とします。
3. 推薦者……………学協会の代表者および推薦委員
4. 候補者推薦件数……………1学協会から2件以内および1推薦委員から1件以内
5. 推薦手続……………所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会あて1部ご送付願います。
6. 推薦締切期日……………平成7年10月9日(月) 必着
7. 選考方法……………下記委員からなる選考委員会において、提出された書類により一次選考を行い、更に面接による二次選考を経て、評議員会において決定します。
なお、二次選考対象の代表研究者の方は、平成7年12月下旬に面接をさせていただきます。

選考委員 (委員長) 宇井理生 猪瀬 博 有馬朗人 竹内郁夫
宗宮重行 吉森昭夫 櫻井英樹 中島尚正
8. 研究助成金の贈呈……………平成8年3月の予定

- (注) a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。また貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- b. この研究助成金は、研究目的を達成するために有効に使用されるものであれば、どのように使われるものを申請されても結構です。ただし、助成金受領決定後、その使途を変更される場合は、事前に当会の承諾を得ていただきます。
助成金は使用期間の制限がありません。
- c. 助成金の受領者は、研究終了時まで毎年「助成研究年次報告書」を、また研究終了時に、「助成研究終了報告書」を提出していただきます。
- d. この助成金は、所得税法(第9条第1項第13号二)の規定により非課税となっています。

(推薦書提出先・連絡先)

財団法人 東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜一丁目8番1号(東レビル)
TEL : (0473) 50-6103 FAX : (0473) 50-6082

1995年6月

女性科学者に明るい未来をの会

会長 湯浅 明

1996年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者 及び 研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立)は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性学者に、毎年、賞(猿橋賞)を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、1990年3月に本会を母体として新設された、公益信託「女性自然科学者研究支援基金」(受託者 東洋信託銀行株式会社)から支出されます。

つきましては、下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿 橋 賞

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者(ただし、下記の推薦締切日で50歳未満)に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金(30万円)をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件(1名)です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度を、本会事務所までお送り下さい。
5. 締切は、1995年11月30日(必着)。
6. 第16回の賞贈呈式は、1996年5月、東京において行う予定です。

なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

第13回(1993) 東京大学教養学部教授 黒田 玲子博士

「非対称な分子の右左やDNA塩基配列の識別のしくみの研究」

第14回 (1994) 岡山大学理学部助教授 白井 浩子博士

「ヒトデの排卵と卵成熟のしくみの研究」

第15回 (1995) 東京工業大学理学部助教授 石井 志保子博士

「代数幾何学における特異点の研究」

研究助成

1. 海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において 満40歳未満）の略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由等を記入して、本会事務所までお送りください。
4. 締切は1995年11月末日と、1996年4月末日の2回。

なお、1992年度以降の研究助成金受給者は次の通りです。

氏 名	学位	所属	出張先
池田 裕子	工博	京都工芸繊維大学助手	中国
田村 知子	修士	大阪市立工業研究所研究員	中国
井上 美穂	理博	京都大学霊長類研究所講師	フランス
内海紀代美	修士	東京大学大学院理学研究科在学	アメリカ
木下 圭	理学修士	日本医科大学助手	アメリカ
本間美和子	医博	東京医科歯科大学医学部助手	アメリカ
熊谷紫麻見	理博	日本学術振興会特別研究員	中国
山口 知子	理博	東京都立工業高専助教授	デンマーク
青木 圭子	理博	静岡大学工学部助手	ハンガリー

女性科学者に明るい未来をの会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電話 03-3330-2455 (FAX 兼用)

第10回塚原仲晃記念賞受賞候補者推薦要領

(寄附行為第4条第2号、褒賞事業)

平成7年6月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者(国内外を問わない)に対して塚原仲晃記念賞を贈呈する。

2. 褒賞金

贈呈件数は原則として1件とし、賞牌ならびに副賞(100万円～200万円)を贈呈する。

3. 推薦者

(1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。(但し、所属機関の長の場合を除く)

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いてもよい)

6. 推薦締切日

平成7年11月30日(木)とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

8. 選考結果の通知

平成8年3月末日までに推薦者および受賞者あて通知する。

9. 塚原仲晃記念賞の贈呈 その他

贈呈決定者に対して、別途通知する。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03)3273-2565(直通)

第10回研究助成候補者推薦要領

(寄附行為第4条第1号, 研究助成事業)

平成7年6月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において, 独創的で国際的評価に値する研究を助成する。研究分野は, 脳神経に関する実験研究のみならず理論・モデリング研究をも含む。候補者は, 単独であっても, また共同研究であってもよいが, なるべく若い研究者の推薦を希望する。

2. 研究助成金

助成額は1件80万円～100万円, 助成件数は8件とする。

3. 推 薦 者

(1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1 推薦者から1件に限る。(但し, 所属機関の長の場合を除く)

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し, 当財団に提出する。(複写用紙を用いてもよい)

6. 推薦締切日

平成7年11月30日(木)とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し, 理事会において決定する。

8. 採否の通知

平成8年3月末日までに推薦者あて, 採否を通知する。

9. 助成金の交付

助成決定者に対しては, 平成8年6月末までに研究助成金を送呈する。

10. 助成金の使途

助成金は, 推薦書記載の通り使用することを原則とする。なお, 経理報告書を平成9年4月中に提出すること。

11. 成果の報告

研究の成果については, 平成9年4月中に成果報告を当財団に提出するものとする。また, 財団主催の研究会において発表を御願いする。助成金による研究を専門誌に発表する場合には, “財団法人ブレインサイエンス振興財団(英文の場合は, Brain Science Foundation)の助成による”旨を書き添えること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03)3273-2565(直通)

第9回海外研究者招聘助成候補者推薦要領

(寄付行為第4条第3号、国際交流事業)

平成7年6月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間(3ヶ月以内)の招聘を助成する。

ただし、助成金は、外国人研究者を招聘する受入責任者に交付する。

2. 招聘の時期

平成8年4月1日から平成9年3月31日の間に外国の研究者を招聘するもの。

3. 助成予定額

1件あたりの助成額は、往復の航空運賃を主とし、30万円までを限度として必要額を若干件助成する。

4. 推 薦 者

(1) 関係学会代表責任者または受入責任者の所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

5. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。(但し、所属機関の長の場合を除く)

6. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いても良い)

7. 推薦締切日

平成8年1月12日(金)とする。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成8年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成8年4月から必要に応じて受入責任者に送呈する。

11. 助成金の使途

外国人研究者招聘助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成果の報告

招聘の成果について、招聘後2ヶ月以内に受入責任者より報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03)3273-2565(直通)

第9回海外派遣研究助成候補者推薦要領

(寄付行為第4条第3号, 国際交流事業)

平成7年6月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

我が国におけるブレインサイエンスの研究の促進を図るため, 国際学会, シンポジウム等への参加, あるいは短期間(6ヶ月以内)の共同研究のための研究者の海外派遣を助成する。

ただし, 平成8年4月から平成9年3月の間に出発出来るものに限る。

2. 助成予定額

1件あたりの助成額は, 往復の航空運賃を主とし, 30万円までを限度として必要額を若干件助成する。

3. 推 薦 者

(1) 関係学会代表責任者または所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。(但し, 所属機関の長の場合を除く)

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し, 当財団に提出する。(複写用紙を用いても良い)

6. 推薦締切日

平成8年1月12日(金)とする。

7. 受入先の承諾書

受入先の承諾書(学会, シンポジウム等参加の場合は, 参加証明書または招待状の写を, 短期の共同研究の場合は, 受入機関または共同研究者の手紙の写)を添付すること。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し, 理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成8年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては, 平成8年4月以降に出発時期に応じて送呈する。

11. 助成金の使途

助成金は, 推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成果の報告

帰国後2カ月以内に派遣の成果について, 報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03)3273-2565(直通)

山田科学振興財団
1996年度研究援助候補推薦要項

援助の趣旨及び内容

1. 本財団は、自然科学の基礎的研究に対して研究費の援助を致します。実用指向研究は援助の対象としません。
2. 援助額は1件当たり200～500万円、総額4,000万円、援助総件数は10件程度ですが、学会からの推薦及び本財団関係者からの個人推薦の中から選考致します。
3. 援助金を給与に充てることは出来ませんが、特に財団が指定した場合を除き、他の使途は自由です。
4. 援助金の使用期間は、贈呈した年度及びその次の年度の計2年間とします。

推薦方法

- イ. 推薦者：本財団が依頼した学(協)会の代表者
- ロ. 推薦件数：1推薦者ごとに2件以内
- ハ. 推薦手続：推薦者は、以下の書類を整え、ご送付願います。
 1. 所定の推薦書用紙又はその写しに必要な事項を記入したもの 4部
 2. 添付書類(研学(96)―5/7ページ参照)

記載上の注意

- イ. 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ロ. 代表研究者は、所属のある場合、当該所属の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。

推薦締切期日

本財団に推薦書が到着する締切期日は
1996年3月31日です。

選考方法

選考委員会において選考の上、理事会が決定します。

選考結果の通知

1996年7月末迄に推薦者及び代表研究者等宛て文書にて通知します。

援助金の贈呈

選考結果の通知後適時銀行振込にて贈呈致します。

推薦書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団
(Yamada Science Foundation)
〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号
電話 大阪 (06) 757局3311 (代表)

研究の成果及び会計の報告

援助金の受領者には、後日当財団の連絡に基づき、研究経過、研究成果、会計について報告書の提出及び研究交歓会での発表をして頂きます。

付 記

- イ. 援助金の使途を変更する場合には、予め本財団の承諾を得て下さい。
- ロ. 研究成果を文書によって発表される際には、本財団(財団法人 山田科学振興財団、Yamada Science Foundation)の援助による旨を記載し、報文の類にあってはその別刷1部、また著書の類にあってはその1部をご寄贈願います。
- ハ. ご提出頂きました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

研 究 者 各 位 へ

推薦者の項に対応する学(協)会は次記のとおりです。学(協)会により締切期日及び募集方法等が異なりますから、代表研究者は応募の際、各学(協)会にお問合わせ願います。

日本天文学会	日本化学会	日本生理学会	日本生物物理学会
日本物理学会	高分子学会	日本遺伝学会	日本発生生物学会
応用物理学会	日本農芸化学会	日本分子生物学会	日本植物生理学会
日本金属学会	日本薬学会	日本動物学会	日本植物学会
地震学会	日本生化学会	日本細胞生物学会	日本免疫学会
地球電磁気・地球惑星圏学会			

戦略研究と高度研究体制の構築を

平成7年5月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、4月に開催された第121回日本学術会議総会の概要と総会第二日に行われた会長基調報告の内容に自由討議の議論を踏まえて修文した「我が国の学術体制を巡って」の一部を紹介します。

日本学術会議第121回総会報告

日本学術会議第121回総会は、平成7年4月19日から3日間にわたって開催されました。

総会初日の午前中は、①「阪神・淡路大震災調査特別委員会の設置」、②「国際農業工学会（Commission Internationale de Genie Rural : CIGR）への加入」の2件が提案され、いずれも賛成多数で可決されました。

阪神・淡路大震災調査特別委員会は、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災が、日本学術会議として緊急に対応すべき課題であるとの結論に達したので、3月27日の第843回運営審議会において新たな臨時（特別）委員会として設置され、総会で承認することとしたものです。審議事項は、阪神・淡路大震災が提起した問題点について、地震学、災害工学等自然科学分野のみならず、人文・社会科学分野を含め総合的に検討することとしています。

また、国際農業工学会への加入は、従来、日本学術会議が日本の科学者の代表機関として、国際学術連合ICSUを始めとする46の国際学術団体に分担金を支払って加入していますが、今回の新規加入の承認によ

り、その数が47となり、国際農業工学会に対応する国内委員会は、農業土木学研究連絡委員会となります。

総会2日目は、伊藤正男日本学術会議会長から、「日本学術会議の課題～高度研究体制を目指して～」と題した基調報告が行われ、会長が提起したさまざまな課題について、会員間の自由討議が繰り広げられました。

この報告は、昨年の第120回総会において第16期活動計画を定めてから既に半年を経過しており、この間の多彩な活動を通じて伊藤会長が考えてきた問題、特に、我が国の学術体制の問題を中心に適宜取捨選択したいいくつかの課題について、伊藤会長自身の見解を述べ、人文・社会科学分野から自然科学分野わたる幅広い会員各位の意見を聞き、会員に共通の基本認識を深めることを目的として行われたものです。

なお、伊藤会長が、基調報告の内容に、自由討議の議論を踏まえて修文した「我が国の学術体制を巡って」は、序文の他7項目から構成されていますが、そのうち2項目について紹介します。

我が国の学術体制を巡って（抄）

—戦略研究と高度研究体制—

日本学術会議会長 伊藤 正男

〈「戦略研究」とその意義〉

大学では知的興味に基づく基礎研究を、企業では実用上の重要性を持つ応用研究を、という古典的な役割分担はもはや成り立たなくなっている。最近英米両国で基礎研究と応用研究の間に設けられた「戦略研究」のカテゴリーは、工学、農学、医歯薬学系の研究室では意識しないまま基礎研究として行われてきたものを多く含み、また企業において「目的基礎研究」と呼ばれるカテゴリーとほぼ対応している。研究者の知的興味と実用価値とは一般的にいて相反するが、そのいずれかに限定せず、両方の要素を両立させるカテゴリーである。研究費を受ける側にとっても、出す側にとっても受容し易い論理を提供し、科学政策上甚だ有効

な整理概念である。（中略）

我が国においては、応用研究に優れる一方、基礎研究は一般に貧弱であり、我が国の応用研究はむしろ国外の基礎研究を基盤とすることが少なくなかった。この点は英国とはちょうど事情が逆であるが、解離した基礎研究と応用研究の間を埋める必要があるのは同様である。この解離の社会的背景にはやはり我が国独自のものがある。我が国の大学においては、研究の自由の主張と産学協同の弊害に対する危惧が強かった一方、企業の方では、我が国の大学の基礎研究にあまり大きな利用価値を見い出さなかったといっは言い過ぎであろうか。率直に言って、今日でも多くの企業家は、大学等で行われる基礎研究に利用価値を認めるのでは

なくて、基礎研究に対する精神的な共感ない慈善（チャリティ）の気持ちから、人材供給のパイプをつなぐ目的のため、あるいは基礎研究只乗りの非難をかわすために、これを支援する必要があると考えておられるように見受けられるといえは誤解であろうか。企業等から大学への奨学寄付金が平成4年度501億円に及んだのはまことに喜ばしいことであるが、受託研究費が53億円に止まっているのは、依然として企業にそのような潜在意識のあることを示唆するように思えてならない。「戦略研究」の概念は、大学等でこれまで基礎研究として一括されてきたカテゴリーの中で、近い将来に应用される可能性を持つものに特別の照明を当て、その企業との近縁性を意識させる効果がある。また、会社等で使われる基礎研究費は、年間6千50億円にのぼるが、これは実際には大部分が「戦略研究」に向けられていると推測され、ここに大学等の研究者との協力の大きな素地が十分にあることが示唆される。（中略）

「脳の科学と心の問題」特別委員会が4月18日の連合部会で中間報告された問題を例にとると、脳がいかに働いて心を生み出すのかの謎を解くことは、基礎科学の最終問題といってよいほど根源的な人間の知的興味の的である。140億といわれる膨大な数の神経細胞の働きがいかにして一つの意識というまとまった働きに統合されるのかは、それ自体極めて深遠な基礎科学の問題である。しかし、脳の研究はその物質的なメカニズムの解明により、脳神経系の病気を根絶し、脳の老化を防ぐといった医療上の大きな「戦略性」を孕んでいる。また、将来脳の情報処理の仕組みが解明されれば、ニューロコンピュータのような新たな原理を持つ情報機械を生み出す工学上の「戦略性」も極めて大きい。さらに、心のレベルについても、育児や教育の参考になり、産業心理学を助け、災害時の特異な心理状態への適切な対処を示唆するなど、人文・社会科学の広い分野での「戦略性」がある。米国の研究者がいち早く議会に働きかけ、1990年に始まる脳の10年Decade of the Brainが決議され、ブッシュ大統領が行政機関に対して脳の研究への支援を要請したのも、これらの戦略性に着目してのことに他ならない。

このように、「戦略性」に注目して強力な研究支援を行うことは、基礎科学としての脳研究にとっても、助けになりこそすれ妨げになるとは思われない。一般的にも「戦略研究」への支援からその基盤である純粋基礎研究への波及効果が期待できるが、ただ、必ずしもそれが望めない分野も少なくない点は注意を要する。研究者の中には、「戦略研究」を重視すると純粋基礎研究が圧迫され、置き去りにされる恐れがあるとして警戒する向きも少なくない。基礎科学の源は人間本来の知的興味にあり、応用とは無縁のところから始まることは確かな事実である。このような知的興味に基づく基礎研究を重視し、支援することが知的な文化的社会にとって有意義であることはもちろんである。あるいは、レーザーの発見のように純粋基礎研究の成果が長い時間の間に周辺技術の進歩により大きな戦略価値を持つようになった事例は数多くあり、基礎研究に潜在

する戦略性を予見することの困難さも指摘される。最近漸く基礎研究への理解を深めてきた我が国の社会に「戦略研究」の概念を持ち込んで、逆効果を招くことは私の本意ではない。私が強調したいのは、我が国においては本来基礎研究が弱体であったのに加えて、「戦略研究」もまた明確に意識されず、大学と企業の間が空白のままに置かれてきたことである。この空白を埋めるために、基本的なコンセプトにまで遡って大学と企業との関係を再構築することの必要性である。

＜我が国に「高度研究体制」を＞

歴史的な変化の時に当たり、学術の格段の推進が待望される今日、世界と我が国の学術体制にまつわる多くの問題を指摘した。我々は、多くの現実的な制約の下、先行きの不透明さに悩みながらも、次の世紀に向けての見通しを明らかにしようと努力しているが、ここにおいて、特に研究者の立場からの発想を基に「高度研究体制」とも呼ぶべき我が国の将来の学術体制を構想することが重要と考える。

この体制を実施するためには、まずともかく大きな研究資金が必要である。ゆっくりながら堅実に改善を図っていく我が国得意のグレードアップ方式では、この競争的な世界の中で生き残ることは難しい。すでにすっかり体制を整え直し、急速に進みだした世界の進度に遅れないようにするだけでも容易ではない。激しい先取権争いから脱落すれば、すぐ遠く置き去りにされてしまう。これまでのように、他国が多額の犠牲を払って開拓した路を安全に辿っていくことはもはやできない。誰にとっても始めてのフロンティアで、世界と互角に公正に競争していかなければならない。これまでのように、最小の投資で最大の効果を挙げることは望むべくもない。最大の効果は最大の投資をするものにしか保証されない。（中略）

このような「高度研究体制」は、前期において日本学術会議が提案した国際貢献のための新システムの構想を包含し、昨年9月我々が採択した第16期活動計画の精神を凝縮して現するものである。恐らくは我が国の研究者の多くが抱えている強い願望の表現であるが、ただの願望ではなく、このようなものがなければ、我々研究者の未来はありえないという厳しく強い要請を含んだものである。研究者本来の自由で創造的な学問的興味を追求しながら、国や社会の強力な要請に応え、深刻な地球規模問題の解決に尽力することを可能にするためには、なくてはならない体制である。

戦後50年間、営々として築いてきた我が国の学術の現状が、このような要請にどのようにに接近し、あるいはどのようににまだ遠いのか、今こそ冷静に分析すべき時である。日本学術会議の審議の中から、この「高度研究体制」のあるべき姿をより具体的に現せば、それは今日我が国の学術体制の現状を映し出し、それがいかに高度とはいいがたい状態にあり、むしろ至る所に危機的な状況が伏在していることを示すだろう。そして今後、我々が努力を結集すべき明確な目標を与えてくれるであろう。

（全文は、日本学術会議月報平成7年5月号参照）

会 員 異 動

<新入会員>

(氏名)	(所属)	(住所)	(①テーマ、②材料)
薄井 一恵	新技術事業団山元行動 進化プロジェクト	〒194 町田市南大谷11 三菱化学生命科学研究 所内	①雌雄差のある脳神経系構造、交 尾行動に関連する遺伝子発現機 能部位の解析 ② <i>Drosophila melanogaster</i>
久保原 禅	群馬大学生体調節研究 所調節因子部門	〒371 前橋市昭和町 3-39-15	①腫瘍細胞の再分化誘導因子の単 離・同定と再分化機構の解析 ②各種腫瘍細胞、細胞性粘菌 <i>Dictyostelium</i>
増田 彰	愛知県がんセンター研 究所超微形態学部	〒464 名古屋市千種区鹿子 殿1-1	①胸腺上皮の生長制御、細胞癌化 シグナル伝達 ②
高島 貴志	名古屋大学アイソトー プ総合センター	〒464-01名古屋市千種区不老 町	①発生生物 ②両生類
荒木 喜美	熊本大学医学部附属遺 伝発生医学研究施設	〒862 熊本市九品寺 4-24-1	①発生に関する遺伝子の単離・解 析 ②E S細胞・マウス
和田 洋	京都大学理学部動物学 教室	〒606-01京都市左京区北白川 追分町	①ホヤを中心とした後口動物の比 較発生生物学 ②
佐々木 洋	大阪大学細胞生体工学 センター形態形成分野	〒565 吹田市山田丘1-3	①発生における体軸パターン形成 の分子機構の解析 ②マウス
宮崎 歴	新技術事業団吉里再生 機構プロジェクト	〒300-26つくば市東光台 5-9-6 JMC2F	①再生過程におけるECMの役割 ②イモリ
須田 容子	熊本大学医学部形態発 生学部門	〒860 熊本市本荘2-2-1	①マウス前脳形態形成 ②マウス、E S細胞
正木 全	(財)神奈川科学技術 アカデミー生体シグナ ル伝達プロジェクト	〒250 小田原市成田540 明治乳業ヘルスサイエ ンス研究所内KAST	①ジーンターゲットングによる TREB5 遺伝子の機能解析 ②
塚原 正俊	(財)神奈川科学技術 アカデミー生体シグナ ル伝達プロジェクト	〒250 小田原市成田540 明治乳業ヘルスサイエ ンス研究所内KAST	①ジーントラップ法によるマウス 遺伝子の探索 ②
三浦 裕仁	三菱化学生命科学研究 所	〒194 町田市南大谷11	①頭部域形成へのホメオボックス 遺伝子の関与の解析 ②ニワトリ、マウス等
野呂 信弘	新技術事業団吉里再生 機構プロジェクト	〒300-26つくば市東光台 5-9-6 日本重化学工業(株) 筑波研究所内	①シナプス形成の可塑性 ②アフリカツメガエル、ラット

伊藤 弘樹	新技術事業団山元行動 進化プロジェクト	〒194	町田市南大谷11 三菱化学生命科学 研究所	①分子行動遺伝学（求愛行動を 制御する遺伝子の解析） ②キイロショウジョウバエ
津田 玲生	名古屋大学理学部生物 学科動物学第二講座	〒464	名古屋市千種区不 老町	① ②キイロショウジョウバエ
杉山 伸	名古屋大学理学部生物 学科	〒464-01	名古屋市千種区 不老町	①シグナル伝達と発生 ②キイロショウジョウバエ
磯田 和良	理化学研究所分子遺伝 学研究室	〒305	つくば市高野台 3-1-1	①初期胚における極性形成の分 子メカニズム ②キイロショウジョウバエ、培 養細胞
川崎 秀樹	宇都宮大学農学部生物 生産科学科	〒321	宇都宮市峰町350	①昆虫の発生、内分泌 ②カイコ
三浦 正幸	筑波大学基礎医学系分 子神経生物学	〒305	つくば市天王台 1-1-1	①脊椎動物におけるプログラム、 細胞死の分子機構 ②マウス
高田 律子	京都大学理学部分子発 生生物学研究センター	〒606-01	京都市左京区北白 川追分町	①脊椎動物の初期発生の研究 ②マウス
東島 眞一	基礎生物学研究所細胞 情報	〒444	岡崎市明大寺町西 郷中38	①ゼブラフィッシュの神経発生 ②ゼブラフィッシュ
伊藤 啓	新技術事業団山元行動 進化プロジェクト	〒194	町田市南大谷11 三菱化学生命科学 研究所内	①中枢神経系の発生メカニズム ②ショウジョウバエ
中村 隆範	徳島大学酵素科学研究 センター酵素細胞学部 門	〒770	徳島市蔵本町 3-18-15	①アクチビン・インヒビンのシ グナル伝達機構の解析 ②各種実験動物、培養細胞
都築 政起	大阪府立大学農学部実 験動物学講座	〒593	堺市学園町1-1	①ウズラ、マウスの発生遺伝学 ②
渡邊 俊樹	東京大学海洋研究所海 洋分子生物部門	〒164	中野区南台1-15-1	①脱皮ホルモンによる遺伝子発 現の制御 ②クルマエビ (<i>Penaeus japonicus</i>)
川村 光毅	慶應義塾大学医学部解 剖学教室	〒160	新宿区信濃町35	①神経発生解剖学 ②マウス
柳川 伸一	京都大学ウイルス研究 所がん遺伝子	〒606	京都市左京区 聖護院川原町	①Wnt/winglessシグナル 伝達経路、特にDishevelled の生化学的解析 ②Wnt受容体の検索、 <i>Drosoph- ila disc</i> 培養細胞系
久保 英夫	東京都臨床医学総合研 究所生体膜研究部門	〒113	文京区本駒込 3-18-22	①両生類の受精 ②アフリカツメガエル
井上 佳子	福井医科大学解剖学第 一講座	〒910-11	福井県吉田郡松岡町 下合月23	①神経系及び体節由来組織の形態 形成機構の研究 ②ニワトリ、ウズラ

古屋 秀隆	大阪大学理学部生物学教室	〒560 豊中市待兼山町1-16 自然科学棟	①中生動物ニハイチュウの発生 ②
重谷 安代	熊本大学医学部附属遺伝発生医学研究施設形態発生部門	〒860 熊本市本荘2-2-1	①神経発生学、遺伝発生学 ②マウス、ニワトリ
横田 幸雄	愛知県立大学生物学研究室	〒467 名古屋市瑞穂区高田町3-28	①卵黄、細胞外マトリックス ②ウニ
小林 亨	基礎生物学研究所生殖研究部門	〒444 岡崎市明大寺町西郷中38	①生殖細胞の分化の分子機構 ②ウナギ
小柴 和子	新技術事業団吉里再生機構プロジェクト	〒300-26 つくば市東光台5-9-6	①有尾両生類の四肢の再生 ②イモリ、アホロートル
後藤太一郎	三重大学教育学部生物学教室	〒514 津市上浜町1515	①配偶子形成、受精、神経発生、機械感覚 ②イソヤムシ、カエデイソヤムシ
諸橋憲一郎	九州大学大学院医学系研究科分子生命	〒812-82 福岡市東区馬出3-1-1	① ②
森本 智子	武田薬品工業(株)創薬研究本部第二研七部	〒532 大阪市淀川区十三本町2-17-85	①形態形成全般 ②ラット
三上 正義	北日本生物教材	〒036-15 青森県中津軽郡相馬村大字坂市沢113-3	① ②
秋山 豊子	慶應義塾大学法学部一般教育	〒223 横浜市港区日吉4-1-1	①色素細胞の分化(分子レベルから形態まで) ②ホヤ、メダカ、ニワトリ
網蔵 令子	筑波大学・生物科学系	〒305 つくば市天王台1-1-1	①生殖系列の分化の形態学的研究 ②ショウジョウバエ、ウニ
(学)恒川直樹	日本大学農獣医学部動物生体機構学研究室	〒252 藤沢市亀井野1866	①生殖系列細胞における特異遺伝子発現 ②ニワトリ
(学)中條信成	久留米大学分子生命科学研究所遺伝情報制御部門	〒830 久留米市合川町2432-3 久留米リサーチセンタービル内	①アフリカツメガエルの卵成熟過程 ②アフリカツメガエル
(学)SALOMA Cynthia	大阪大学細胞生体工学センター	〒565 吹田市山田丘1-3	①胚発生におけるN-myc遺伝子の役割 ②
(学)丹羽 尚	徳島大学工学部生物工学科野地研究室	〒770 徳島市南常三島町2-1	①昆虫類における付属肢の再生 ②コオロギ等
(学)佐藤ゆたか	京都大学大学院理学研究科動物学専攻分子発生生物学研究室	〒606-01 京都市左京区北白川追分町	①ホヤの筋肉の発生 ②マボヤ
(学)原田淑人	京都大学大学院理学研究科動物学専攻分子発生生物学研究室	〒606-01 京都市左京区北白川追分町	①脊索の系統発生 ②バフンウニ

(学)佐藤和納	東京都立大学大学院理学研究科生物学専攻発生学研究室	〒192-03八王子市南大沢 1-1	①ニワトリ胚前胃上皮においてペプシノゲンと対称的な発現パターンを示すケラチン遺伝子の解析 ②ニワトリ
(学)千葉章太	甲南大学大学院自然科学研究科	〒658 神戸市東灘区岡本 8-9-1	①カタユウレイボヤ初期発生における分子メカニズムの解明 ②カタユウレイボヤ
(学)田中仁夫	甲南大学大学院自然科学研究科	〒658 神戸市東灘区岡本 8-9-1	①カタユウレイボヤ初期発生における分子メカニズムの解明 ②カタユウレイボヤ
(学)常定正信	静岡大学大学院理学研究科生物学専攻	〒422 静岡市大谷836	①卵巣性テラトーマの形成機構 ②マウス (LTXBJ-CSA系統)
(学)山崎仁香	基礎生物学研究所細胞融合部門	〒444 岡崎市明大寺町西郷中38	①嗅覚受容体遺伝子の発現調節機構 ②マウス
(学)荒井俊光	東京大学大学院薬学系研究科生命薬学専攻微生物薬品化学教室	〒113 文京区本郷7-3-1	①再生における形態形成の分子機構 ②ワモンゴキブリ
(学)伊東利津	熊本大学大学院理学研究科生物科学専攻	〒860 熊本市黒髪 2-39-1	①イモリ精子形成過程における精原細胞とセルトリ細胞の相互作用 ②アカハライモリ
(学)小林千余子	姫路工業大学大学院理学研究科	〒678-12兵庫県赤穂郡上郡 町金出地1479-1	①プラナリアの再生 ②プラナリア
(学)宮本卓也	姫路工業大学大学院理学研究科	〒678-12兵庫県赤穂郡上郡 町金出地1479-1	①プラナリアの再生 ②プラナリア
(学)副嶋幸博	姫路工業大学大学院理学研究科	〒678-12兵庫県赤穂郡上郡 町金出地1479-1	①プラナリアの再生 ②プラナリア
(学)油本夏子	東京理科大学理工学部応用生物科学科	〒278 野田市山崎2641	①細胞外マトリックス (ECM) が細胞の伸展、増殖および分化に及ぼす影響 ②
(学)崎山潤一	名古屋大学理学部分子生物学科第五講座	〒464-01名古屋市千種区 不老町	①消化管形成過程における Hox 遺伝子の機能解析 ②ニワトリ
(学)村橋史朗	大阪大学大学院理学研究科生理学専攻	〒560 豊中市待兼山町 1-1	① ②
(学)杉山一郎	大阪教育大学大学院教育研究科理科教育専攻	〒582 柏原市旭ヶ丘 4-698-1	① ②
(学)田村美和	大阪市立大学大学院理学研究科発生生物学研究室	〒558 大阪市住吉区杉本 3-3-138	①イトマキヒトデ胚再構築系を用いる形態形成に関する研究 ②
(学)村岡英俊	東京大学大学院農学生命科学研究科応用動物科学専攻応用遺伝学講座	〒113 文京区弥生1-1-1	①哺乳類における性分化支配遺伝子の解析 ②

(学)阿部幸一郎	熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設発生遺伝部門	〒862 熊本市九品寺4-24-1	①分子発生学 ②マウス
(学)齋藤 実	埼玉大学大学院理工学研究科生体制御学専攻	〒338 浦和市下大久保255	①ウニ幼生に対する甲状腺ホルモンの作用 ②
(学)笹土 隆雄	名古屋大学大学院理学研究科生物学専攻	〒464-01名古屋市千種区不老町	①メダカ胚細胞の培養 ②メダカ
(学)有泉 高史	東京大学大学院理学系研究科動物学専攻浅島研究室	〒153 目黒区駒場3-8-1	①アクチビンAによる両生類初期胚での細胞分化および形態形成の制御 ②アカハライモリ、アフリカツメガエル
(学)安藤 覚	名古屋大学生物分子応答研究センター純系動物開発分野	〒464-01名古屋市千種区不老町	①メダカES様細胞の培養 ②
(学)藤澤千笑	総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻	〒411 三島市谷田1111 国立遺伝学研究所	①性決定、性転換機構 ②ヒドラ
(学)望月敦史	九州大学理学部生物学科数理生物学講座	〒812-81福岡市東区箱崎6-10-1	①数理モデルによる発生・形態形成の理解 ②
(学)澤進一郎	基礎生物学研究所遺伝子発現統御第一研究部門	〒444 岡崎市明大寺町西郷中38	①植物分子発生学 ②アラビドプシス
(学)松本和幸	東京都立大学理学部生物	〒192-03八王子市南大沢1-1	①脊椎動物の形態形成 ②ニワトリ
(学)千葉奈緒子	名古屋大学理学部分子生物学科第五講座	〒464-01名古屋市千種区不老町	①ゼブラフィッシュ初期胚を用いたセキツイ動物の初期発生における細胞運命決定の機構について ②
(学)上野竜也	京都大学理学部動物学教室発生生物学研究室	〒606-01京都市左京区北白川追分町	①初期発生におけるチロシンリ酸化 ②アフリカツメガエル
(学)伊藤弓弦	東京大学理学部動物学教室分子発生学研究室	〒113 文京区本郷7-3-1	①形態形成 ②アフリカツメガエル
(学)植竹由美	お茶の水女子大学理学部館山臨海実験所	〒294-03館山市香11	① ②
(学)信賀 順	東京大学理学部動物学教室分子発生学研究室	〒113 文京区本郷7-3-1	①発生におけるポリアミンの役割 ②ゼノパス
(学)日笠弘基	東京大学理学部動物学教室分子発生学研究室	〒113 文京区本郷7-3-1	①初期発生における遺伝子発現 ②アフリカツメガエル

(学)宮 隆史	京都大学理学部動物学 教室	〒606-01京都市左京区北白川 追分町	①ホヤの初期発生における局在 因子の役割 ②マボヤ ①ショウジョウバエにおける新 しいシグナル伝達因子の解析 ②キイロショウジョウバエ ① ②
(学)吉田新一郎	名古屋大学理学部生物 学科動物学第二講座	〒464-01名古屋市千種区不 老町	①マウス精巣組織の加齢変化 ② ①Ion Channels in Sperm Physiology ②Sea Urchins, Mice
(学)大崎加奈枝	奈良先端科学技術大学 院大学バイオサイエン ス研究科	〒630-01生駒市高山町 8916-5	①マウスのHoxとそのターゲ ット遺伝子の解析 ② ①Me1-18機能解析 ②マウス
(学)種村健太郎	東京大学農学部獣医学 教室	〒113 文京区弥生1-1-1	①ショウジョウバエの、神経系 の形成と必須な遺伝子Pro speroの発現の分子メカ ニズムの解析 ②
(学)DARSZON Alberto	Inst.de Biotecnologia, UnivNacional Autonom a de Mexico (Apdo.5103, Cuernavaca, Mor ellos 62271, Mexico)		①生物の形態形成 ②ヒドラ ①骨形成タンパク質の発現制御 ②培養細胞、アフリカツメガエル ①生殖細胞、胎盤 ②マウス ①ニワトリ初期胚細胞の浸潤 (浸潤性と原条形成) 機構の解析 ②
(学)早坂直人	大阪大学細胞生体工学 センター形態形成分野	〒565 吹田市山田丘1-3	①発生と進化 ②ホヤ ①進化と形態形成 ②原素動物 ①精子プロテアソームの調製因子 ②ウニ、シロサケ ①ニワトリ肢芽形態形成機構の 解析 ②
(学)赤坂 武	千葉大学医学部高次機 能制御研究センター免 疫機能分野	〒260 千葉市中央区亥鼻 1-8-1	
(学)平田 丞	国立精神・神経センタ ー神経研究所遺伝子工 学研究部	〒187 小平市小川東町4- 1-1	
(学)川島久佳	東北大学電気通信研究 所澤田研究室	〒980-77仙台市青葉区片平 2-1-1	
(学)世良実穂	北海道大学薬学部生体 機能化学講座	〒060 札幌市北区北12条 西6丁目	
(学)田中 聡	国立遺伝学研究所発生 工学研究室	〒411 三島市谷田1111	
(学)茂木和枝	神奈川大学大学院理学 研究科生物科学専攻	〒259-12平塚市土屋2946	
(学)勝山 裕	東京都立大学理学部生 物学	〒192-03八王子市南大沢 1-1	
(学)和田修一	東京都立大学理学部生 物学	〒192-03八王子市南大沢 1-1	
(学)大川浩作	東京大学理学部附属臨 海実験所	〒238-02三浦市三崎町小網代 1024	
(学)田中幹子	東北大学理学部生物発 生生物井出研	〒980-77仙台市青葉区荒巻 字青葉	

(学)外岡資朗	熊本大学大学院医学研究科脳免疫統合科学系専攻神経分化学講座	〒862 熊本市九品寺4-24-1	①神経分化学 ②
(学)相原瑞樹	東京大学理学部生物科学	〒238-02三浦市三崎町小網代1024 臨海実験所	①ウニ胚の左右非相称がどういう過程でつくられるか ②ウニ胚、稚ウニ
(学)横井勇人	名古屋大学生物分子応答研究センター純系動物開発分野	〒464-01名古屋市千種区不老町	①メダカ、形態形成遺伝子の解析 ②メダカ
(学)栃谷史郎	東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻放射線生物学研究室	〒113 文京区本郷7-3-1	①形態形成 ②メダカ
(学)清水正幸	名古屋大学理学部生物学科第七講座	〒464-01名古屋市千種区不老町1	①神経発生生物学 ②
(学)玉腰知子	広島大学大学院理学研究科生物科学専攻発生生物学講座	〒739 東広島市鏡山1-3-1	①無尾両生類幼生の変態に関する研究 ②
(学)山内正規	徳島大学大学院工学研究科	〒770 徳島市南常三島町2-1	①ニワトリ四肢の形成 ②ニワトリ胚
(学)尾身 実	東北大学大学院理学研究科生物学専攻	〒980-77仙台市青葉区荒巻字青葉	①脊椎動物の四肢パターン形成機構 ②
(学)土田順司	大阪大学微生物病研究所動物実験学部門	〒565 吹田市山田丘3-1	①分子発生学、精細胞分化メカニズムの研究 ②testicular germ cell
(学)山口信幸	筑波大学大学院生物科学研究科	〒305 つくば市天王台1-1-1	①有性生殖の分子機構 ②
(学)金津美都	京都大学医学部分子遺伝学教室	〒606-01京都市左京区聖護院川原町53	①原腸陥入期マウスにおける血液系細胞の分化決定 ②マウス
(学)高倉伸幸	京都大学医学部分子遺伝学教室	〒606-01京都市左京区聖護院川原町53	① ②
(学)遠藤哲也	東北大学理学部生物科学分子細胞生物学講座発生生物	〒980-77仙台市青葉区荒巻字青葉	①脊椎動物の四肢再生機構 ②
(学)桑名久永	三菱化学生命科学研究所GroupX	〒194 町田市南大谷11	①ショウジョウバエ ②ショウジョウバエ
(学)小野浩一郎	京都大学大学院理学研究科生物物理学専攻物質発現学講座	〒606 京都市左京区北白川追分町	①水晶体分化の分子機構 ②ニワトリ
(学)中村直仁	東京大学大学院農学系研究科応用動物科学専攻応用遺伝	〒113 文京区弥生1-1-1	① ②

<住所・所属変更>

若松 義雄	Jim Weston's Lab., Institute of Neuroscience, Univ. of Oregon (Eugene, OR 97403-1254, U. S. A)	
花岡 陽一	群馬大学生体調節研究所	〒371 前橋市昭和町3-39-15
前田 美香	東北大学理学部生物学科	〒980-77 仙台市青葉区荒巻青葉
森 千里	京都大学医学部解剖学教室第一講座	〒606-01 京都市左京区吉田近衛町
古野 伸明	九州大学理学部生物学科発生	〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1
北林 一生	国立がんセンター研究所放射線研究部	〒104 中央区築地5-1-1
橋本 陽一	(株) マリン企画	
佐方 功幸	九州大学理学部生物学科発生生物学講座	〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1
澤田佳一郎	生命誌研究館	〒569 高槻市紫町1-1
加藤 容子	近畿大学動物発生工芸研究所	〒631 奈良市中町3327-204
西澤真由美	九州大学理学部生物学教室発生生物学講座	〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1
岡田 清孝	京都大学理学部植物学教室分子応答機構学講座	〒606 京都市左京区北白川追分町
岡村 康司	通商産業省工業技術院生命工学工業技術研究所 生体機能制御研究室	〒305 つくば市東1-1
内山 久敏	浜松ホトニクス (株) 筑波研究所	〒300-26 つくば市東光台5-9-2
古川 和広	名古屋大学理学部生物学教室	〒464-01 名古屋市中区千種区不老町
古田 泰秀	c/o Dr. B. Hogan, Dept. of Cell Biology, Vanderbilt University Medical School (Nashville, TN 37232-2175, U. S. A.)	
小山 洋道	横浜市立大学看護短期大学部	〒236 横浜市金沢区福浦3-9
櫻井 隆繁	福島県環境医学研究所	〒979-13 福島県双葉郡大熊町 大字下野上字大野476-1
竹内 拓司	石巻専修大学理工学部生物生産工学科	〒986 石巻市南境新水戸1
山口 武雄	相山女学園大学人間関係学部	〒470-01 日進市岩崎町竹ノ山37-234
野呂知加子	新技術事業団さきがけ研究21「細胞と情報」 筑波研究コンソシアム内	〒300-26 つくば市東光台5-9-4
中澤 透	放送大学	〒261 千葉市美浜区若葉2-11
厚地 靖雄	聖マリアンナ医科大学生物学科	〒216 川崎市宮前区管生2-16-1
豊田 裕	帯広畜産大学原虫病分子免疫研究センター	〒080 帯広市稲田町西2線
谷口 茂彦	藤田保健衛生大学総合科学研究所	〒470-11 豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98
小池 敏	Upjohn Lab. Drug Development Toxic II, 300-228, The Upjohn Company (301 Henrietta St., Kalamazoo, MI 49007, U. S. A.)	
中野 芳朗	ERATO Yamamoto Behavior Genes Project, Hawaii Subgroup, Univ. Hawaii, Manoa (3050 Mile Way, Gilmore 310, Honolulu, HI 96822, U. S. A.)	

- 和田 洋 c/o Prof. Holland, Schl. of Animal & Microbiol Scis., The Univ. of Reading
(Whiteknights, P. O. Box 228, Reading, RG6 6AJ, U. K.)
- 山崎由起子 三菱化学生命科学研究所グループF 〒194 町田市南大谷11
- (学)水野恭伸 国立精神・神経センター神経研究所診断研究部 〒187 小平市小川東町4-1-1
- (学)井内良仁 山形大学医学部生化学第二講座 〒990-23 山形市飯田西2-2-2
- (学)荻野 肇 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス
研究科分子発生生物学 〒630-01 生駒市高山町8916-5
- (学)野村 彰 三菱化学生命科学研究所生命画像情報研究室 〒194 町田市南大谷11
- (学)清水 健 国立国際医療センター研究所感染熱帯病研究部
細菌感染研究室 〒162 新宿区戸山1-21-1
- (学)植木龍也 熊本大学医学部附属遺伝発生医学研究施設
形態発生部門 〒860 熊本市本荘2-2-1
- (学)横倉隆和 (財)大阪バイオサイエンス研究所第4研究部 〒565 吹田市古江台6-2-4
- (学)利根川あかね 北里大学理学部生物科学科分子発生学講座 〒228 相模原市北里1-15-1
- (学)榊原伸一 筑波大学基礎医学系分子神経生物学教室 〒305 つくば市天王台1-1-1
- (学)澤本和延 筑波大学基礎医学系分子神経生物学教室 〒305 つくば市天王台1-1-1
- (学)村田卓也 奈良先端科学技術大学院大学バイオ S 研究科
分子発生生物学講座 〒630-01 生駒市高山町8916

<退会>

福本 理、野呂 信弘、平野 伸二、調子 昭一、鈴木 一好、倉田祥一朗、川又 尚、
林 尚徳

〔賛助会員〕

- | | | |
|-------------------------|-------|-------------------------------------|
| 生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書(株) | 〒 210 | 川崎市幸区塚越 2-260
TEL 044-533-0470 |
| 生命誌研究館 | 〒 569 | 高槻市紫町 1-1
TEL 0726-81-9750 |
| 三菱化学生命科学研究所 | 〒 194 | 町田市南大谷11
TEL 0427-24-6226 |
| 明治乳業(株)ヘルスサイエンス研究所 | 〒 250 | 小田原市成田540
TEL 0465-37-3661 |
| 試薬及び理化学機器販売の理科研(株) | 〒 463 | 名古屋市守山区元郷 2-107
TEL 052-798-6151 |
| 次代を担うバイオテクノロジー和研薬(株) | 〒 606 | 京都市左京区北白川西伊織町25
TEL 075-721-0491 |

(50音順)

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 岡田 益吉

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約1,200名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願い申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局

〒444 岡崎市明大寺町西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門内

日本発生生物学会

TEL(0564)55-7550 FAX(0564)55-7556

-----切-----り-----取-----り-----線-----

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(_____ 口 _____ 円)

住 所

会 社 名

担当者名
電話番号

㊞

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学，医学，薬学，農学をはじめ分子生物学，細胞生物学，遺伝学など，さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり，国内外に約1,200人の会員を持っております。

英文学術雑誌 *Development, Growth and Differentiation* は，日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し，国内に約1,100部，国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下，本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等，是非ご協力頂きますようお願い致します。

広 告 料			
DGD 本誌	1 頁	年 6 回	150,000円
	半 頁	〃	78,000円
インフォメーション	1 頁	年 3 回	30,000円
サーキュラー	半 頁	〃	15,000円

申し込み先：日本発生生物学会事務局

〒444 岡崎市明大寺町西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門内

日 本 発 生 生 物 学 会

TEL (0564) 55-7550 FAX (0564) 55-7556

----- 切 り 取 り 線 -----

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

☐ DGD 本誌	1 頁
☐ 〃	半 頁
☐ サーキュラー	1 頁
☐ 〃	半 頁
住 所	
会 社 名	
担当者名	
電話番号	

生細胞の染色に

細胞蛍光標識キット

Cell Linker Technology に基づく細胞染色法で、細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26 蛍光色素と希釈液とを組み合わせた、細胞蛍光標識キットです。

細胞機能に影響しません

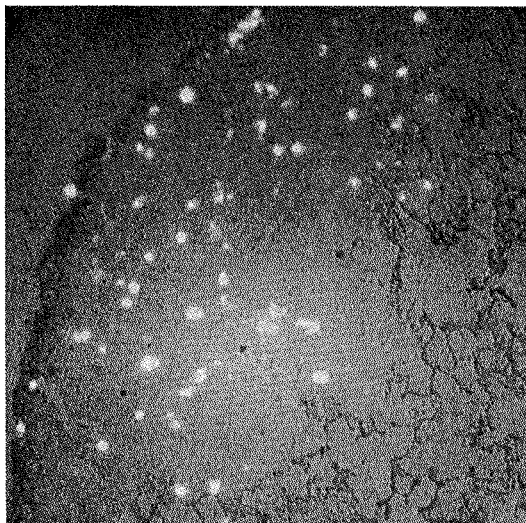
細胞と数分間混合するだけで、生細胞をその機能を損うことなく染色可能で、細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します。

簡便です

従来 ^{51}Cr 等を用いて行われていた LAK 細胞のモニタリングや NK 活性の測定が簡便に、しかも安全に行うことができます。

安定です

ウサギ赤血球を標識した場合、PKH26 では in vivo でその溶出の半減期が100日以上を示し、長期のモニタリングが可能です。



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.

マウス肺癌組織に浸潤している、PKH26で染色した IL-2 処理リンパ球が観察されます。

Photo Courtesy of
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元



大日本製薬株式会社
ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94
TEL 大阪 (06) 386-2164(代表)
東京 (03) 3828-6544(代表)

マウスのテラトーマ

森脇和郎／序

野口武彦 村松 喬／編集

—EC細胞による哺乳動物の実験発生学—

定価 3914 円(税込)A5判・296頁・並製

テラトーマの生物学的な知識、EC細胞の種類と成立、EC細胞を用いた初期胚の細胞生物学・分子生物学的研究、EC細胞のキメラ動物への応用などについて、研究の進展を紹介し、その理論と実験技術を解説してあります。

哺乳動物の初期発生

妹尾左知丸 加藤淑裕 入谷 明

鈴木秋悦 館 郷／編集

—基礎理論と実験法—

定価 15450 円(税込)B5判・480頁・上製

初期発生の基礎理論をはじめに説明し、ついで初期胚を研究対象とする主要な実験研究法を解説してあります。生命現象研究へ大きな手がかりとなる本書は、医学・生物学・農学・薬学を専攻する研究者の必携の書です。

体細胞遺伝学

山根 績 岡田善雄 堀川正克 黒木登志夫／編集

定価 10094 円(税込)A5判・720頁・上製

H V J による細胞融合法、薬物や放射線、化学物質を用いた細胞の突然変異による研究、あるいは遺伝子組換え法を使った研究等体細胞遺伝学研究の最前線をまとめたモノグラフィー。医学・生物学・農学・薬学研究に絶好の参考書です。

理工学社

東京都文京区本駒込5-9-10 電話 03(3828)5211(代) 振替口座番号 東京1-34676 〒113

* 遺伝子工学研究材料 *

アフリカツメガエル

良質実験用アフリカツメガエルの
確実供給に努めております。

■出荷単位

スタンダード(黒)……………10匹単位

新発売

管理ガエル

1994年12月上旬販売開始//

- ◆ご注文はFAXにてお願い申し上げます。
- ◆お気軽にご相談、お問い合わせ下さい。
- ◆留守番TELの場合、ポケットベルをご利用下さい。



●養殖・販売

鴨川生物教材

代表／鎌田泰雄

〒296-01 千葉県鴨川市北小町1626

TEL・FAX 04709(7)1370

ポケットベル 043(470)9943

Journals from The Company of Biologists Ltd.

発生学・生理学関連雑誌ご案内

Development

THE WORLD'S LEADING DEVELOPMENTAL JOURNAL

Editor-in-Chief : Chris Wylie

1987年より Journal of Embryology and Experimental Morphology から誌名変更した本誌は、発生学分野の代表的ジャーナルです。出版のスピードと質の高さは群を抜いており、カラーページの美しさ、投稿者へのページチャージがないこと、また同誌掲載の論文全てにつきそれぞれ200部の抜き刷りを無料で提供すること、なども特徴となっています。本誌は、植物と動物の発生メカニズムを解明する研究のためのフォーラムです。

≫ SCI® Journal Citation Reports® '93 Impact Factor : 7.503 (Developmental Biology 分野 21誌中第2位)

RECENT CONTENTS

Svendsen, P. C. and McGhee, J. D.

The C. elegans neuronally expressed homeobox gene ceh-10 is closely related to genes expressed in the vertebrate eye

Maves, L. and Schubiger, G.

Wingless induces transdetermination in developing Drosophila imaginal discs

Technau, U. and Holstein, T. W.

Head formation in Hydra is different at apical and basal levels

Ware, C. B., Horowitz, M. C., Renshaw, B. R., Hunt, J. S., Liggitt, D., Koblar, S. A., Gliniak, B. C., McKenna, H. J.,

Papayannopoulou, T., Thoma, B., Cheng, L., Donovan, P. J., Peschon, J. J., Bartlett, P. F., Willis, C. R., Wright, B. D.,

Carpenter, M. K., Davison, B. L. and Gearing, D. P.

Targeted disruption of the low-affinity leukemia inhibitory factor receptor gene causes placental, skeletal, neural and metabolic defects and results in perinatal death

・年間購読概価：¥127,500 ・1995年巻号：Vol. 121 (13 issues) ・商品コード：D13585V

BioEssays

～ 分子・細胞・発生生物学のニュースとレビュー ～

Editor : A. S. Wilikins (University of Cambridge)

権威ある ICSU (International Council of Scientific Union) の機関誌として創刊された本誌は、現代生物学の中心的領域である分子細胞生物学を対象分野とし、遺伝子発現や細胞構造から、分子医学や発生調節までのトピックスを扱います。基礎研究の進展状況に主眼をおきますが、医学、産業、農業への応用研究にも十分な配慮を加えています。特にこれらの分野で既に研究を進行・計画中の機関にとって本誌は興味深い文献となるでしょう。生物学研究において不確かで、争点となっている問題を取りあげ、著名専門家の見解を提供すると共に、活発な意見交換の場となることが本誌の目的です。

≫ SCI® Journal Citation Reports® '93 Impact Factor : 5.037

(Biochemistry & Molecular Biology 分野 173誌中第26位)

・年間購読概価：¥35,100 ・1995年巻号：Vol. 17 (12 issues) ・商品コード：B14170A

▽ 販売価格は実勢レートの変動により変わりますので、概算にて表示しております。(消費税別)

▽ ご購読、見本誌のお申し込み、その他のお問い合わせは、最寄りの紀伊國屋書店営業所にお申し付け下さるか、雑誌部マーケティング課宛にハガキまたはFAXにてご連絡下さい。



The Company of Biologists Ltd.



日本販売総代理店
株式会社 紀伊國屋書店

雑誌部 マーケティング課

〒156 東京都世田谷区桜丘5-38-1

Fax. 03-3439-1094

AQUA

1. 業務内容

設計・監理・施工業務

- ・水族館、水産試験場、大学、研究所、臨海実験所、栽培漁業センターなど水生の生物に係わりを持つ施設の建物および建物附属設備の企画、設計、監理および施工。
- ・建物および建物附属設備の設計、監理および施工。
- ・水生生物飼育用環境調節設備の設計、監理および施工。
- ・動植物用環境制御設備の設計、監理および施工。
- ・その他一般空気調和設備、給排水設備、衛生設備および電気設備などの設計、監理および施工。

機器開発、製作、販売業務

- ・生物の環境制御に必要な各種機器の開発、設計、製作および販売。
- ・スイミングプール用各種機器の開発、設計、製作および販売。

2. 機器及び装置

加熱冷却関連機器

加熱ユニット／冷却ユニット／加熱冷却ユニット／チタンヒーター／チタン製ルートを、投込式、プレート式熱交換器

測定記録制御機器

温度調節器／測温体／pH、DO、塩分濃度制御装置／圧力調整器／水質測定器

恒温、定温器、温度勾配装置

低温恒温循環水槽／恒温循環水槽／階層飼育槽／温度勾配装置／超小型インキュベーター／超小型電子式五連恒温槽／ゼットコンデンサー／恒温コンテナ／恒温ボックス／ポータブルインキュベーター

無菌、殺菌、ろ過装置

海水用流水殺菌装置／オゾン紫外線流水殺菌装置／流水式加熱滅菌装置／無菌ろ過器／本城式プランクトン濃縮装置／脱塩素装置／活性炭フィルター／自動砂洗浄ふるい機

環境調節装置、恒温室

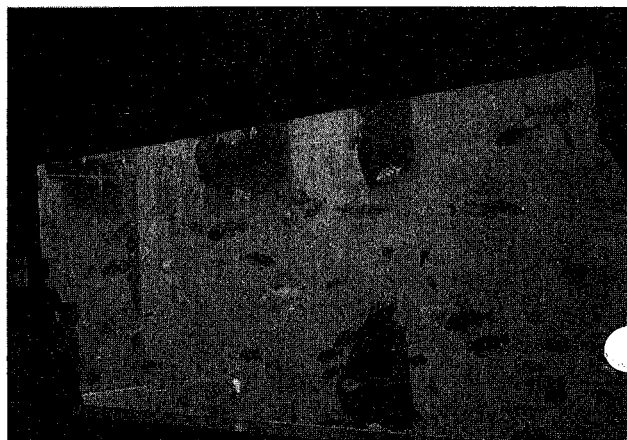
マルチハイデンス装置／水生生物環境調節装置／ヤリイカ飼育水槽／加熱冷却ろ過循環ユニット／水平垂直温度勾配反応試験装置／魚介類飼育用加圧水槽／潮汐水槽／溪流のぞき水槽／回流水槽／加圧式インキュベーター／魚介類呼吸量測定装置／塩分濃度調節装置／藻類培養装置／海草育成器／魚類選好忌避温度試験装置／活魚輸送車／タイドプール／低温生物飼育培養室／恒温室／プレハブ冷蔵庫／動物飼育室／木村式多段式ふ化槽

飼育用品、医薬品

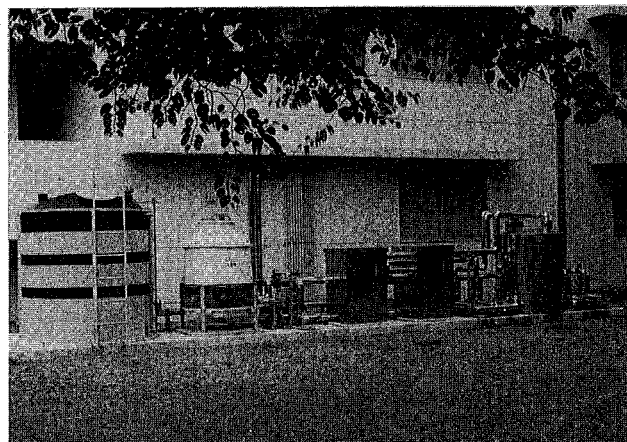
ガラス、アクリル、FRP、ポリカーボネート等各種水槽／フィルター／水ポンプ／空気ポンプ／エアーストン／酸素分散器／エアークック／ジョイント／照明装置／自動ライトコントローラ／砂、砂利、大磯砂、珊瑚砂、天然ゼオライト等ろ材／人工海水／動物用（鑑賞魚用）医薬品／温度計／比重計／ビニールホース／網

プール用品

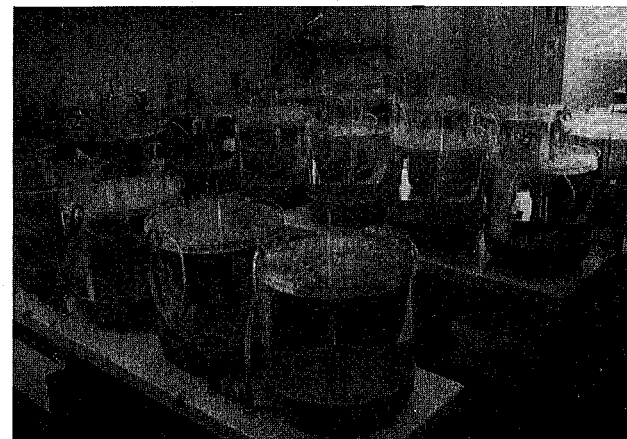
照明用、観察用水中窓／水中照明装置／水門



▲福山大学マリンバイオセンター 大型飼育水槽 150 m³



▲遼洋水産研究所 恒温生物飼育実験室用屋外冷却設備



▲東京都立大学 水棲生物飼育施設内のマルチハイデンス装置